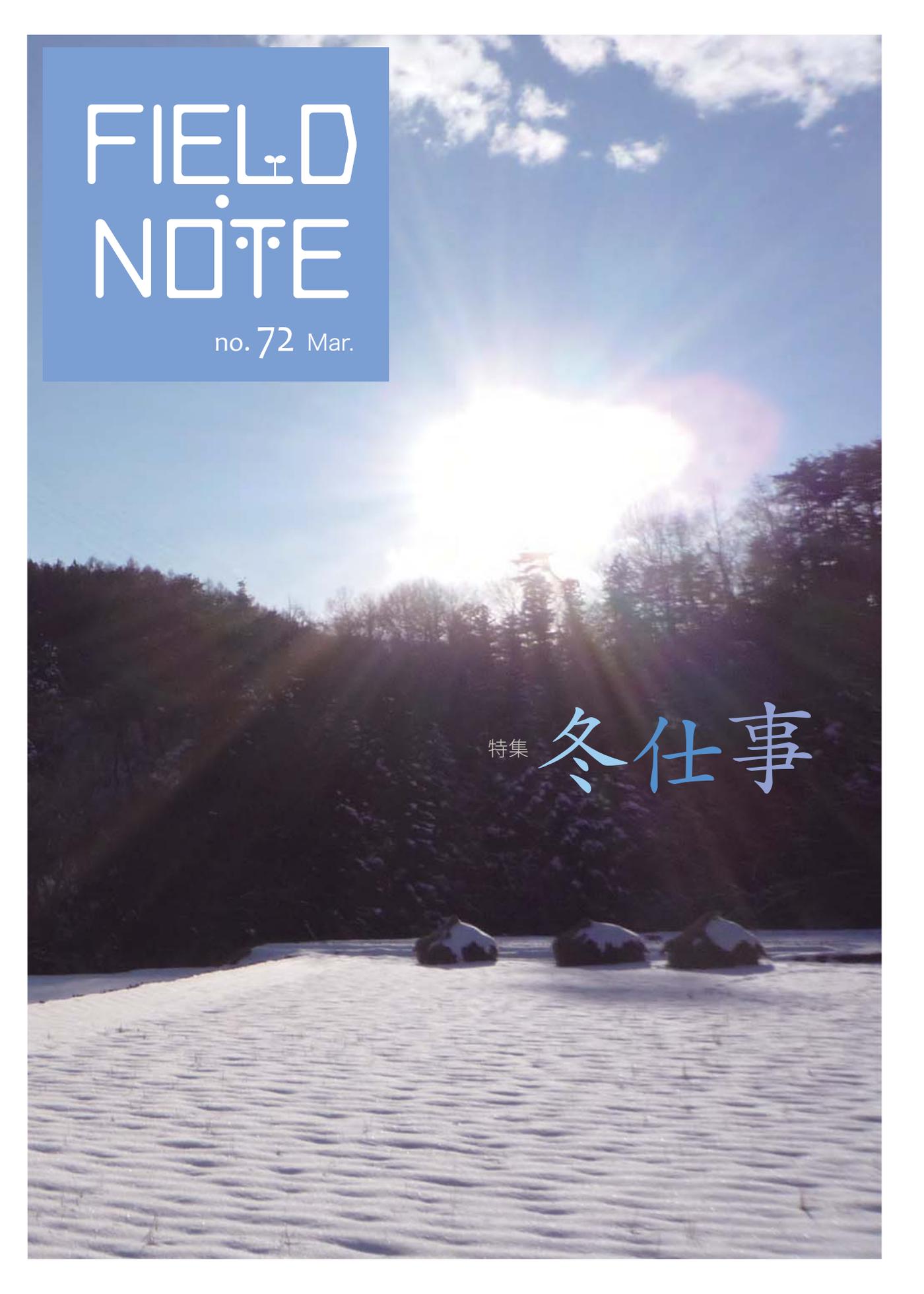


FIELD NOTE

no. 72 Mar.

特集 冬仕事



特集

冬仕事

06 ほんの少し、こたつから出て

08 ちいさな博物館の冬仕事

10 高速道路の雪かき

12 小正月の「飾り」

14 風景に見つけた冬仕事

15 特集を終えて



FIELD NOTE

no. 72 Mar.

CONTENTS

表紙・ギャラリー写真：香西恵
「渡邊宗男さんのわらにお」

表紙：中屋敷の梅の剪定の帰りに撮影。雪で覆われた田の端にたたくみ雪を頂いていた（2012.1.26撮影）／ギャラリー：後日、渡邊さんに案内していただいた（14頁に詳細記事）。すっかり雪がとけた田の土はぬかるみ、渡邊さんに言われて足もとを見ると小さなレンゲが顔をだしていた（2012.2.10撮影）

- 16 起き上がる朝——とことん関わる教育——
- 18 ひろいもの 第3回 鳥の巣
- 20 フィールド・ミュージアムのたのしみ 第16回
谷の町・史の里 都留市高尾町通り 山本書店①
～都留大生の学びを支える～
- 24 インタビュー 南都留森林組合（後編）
木を伐る、その現場
- 27 地域の語りが示すもの
- 30 民話のあと
- 32 続・暖を取る～小さな掘り炬燵～
- 34 自分をみつめる 香りのアトリエ「紗泡」
- 36 写真を「撮る」ということ
- 38 「つくる」をみつめる 第3篇
心と言葉を繋げる詩友会
- 40 先生を訪ねる 最終回 学びをたのしむ
- 44 FIELD・NOTE NEWS
- 46 編集後記



『フィールド・ノート』では「都留の自然と人との交流」をテーマに、地域の自然・人・文化に関する情報を記録し、発信しています。裏表紙のロゴの絵はアメリカのナチュラリスト、ヘンリー・D・ソローの著書『ウォールデン 森の生活』の初版本扉に、ソローの妹ソフィアが描いたものです。ロゴにそえられている「Grow Wild」はソローの言葉で、その思想をわたしたちも大切にしたいとの想いを込めました。バックナンバーは都留文科大学コミュニケーションホール地下一階の地域交流研究センターにありますので気軽にいらしてください。







特集

冬仕事

実り多い秋が過ぎ去り、
山も畑もしんと静まりかえって、
人も生きものも息をひそめているようです。

冬は何もない季節、
いろんなことが止まる季節。
つい、そんな風に思ってしまう。

けれど冬の世界に
足を一步踏み入れてみると、
想像していたよりも
ずっと広がりのある季節なのだと
気づきます。

冬にしかできないこと、
冬だからやりたいこと。
この季節におこなわれる人の営みを
私たちは「冬仕事」と名づけました。

仕事から冬を見つめたとき、
冬はどんな姿を見せてくれるのでしょうか。

水掛菜畑で「水ねぎ」の収穫をする清水貞一さん(88)
十日市場では、冬でも水温の下がらない湧水を利用して田んぼのあとに水掛菜をつくる。水掛菜は正月の雑煮の青物に欠かせず、暮れになると長靴をはいての収穫作業が忙しい。この日収穫ピークを過ぎた夕方の畑では、清水さんが「水ねぎ」を収穫していた。「水ねぎ」は、秋まで畑で育てたねぎを水掛菜畑の端に植え替えて、水を掛けながら育てたもの。ねぎ味噌にして食べるのがおいしいそうだ。

(2012.1.26 撮影：香西恵)

ほんの少し、 こたつから出て

漬けものが好きだ。自分で漬けて食べてみたい。しかしどのようにして漬ければいいのかわからなかった。そこで、毎年白菜を漬けているという渡邊さととさん(80)のお宅へ伺って話を聞き、じっさいに白菜の漬けものを漬けてみることにした。

藤森美紀(社会学科3年)=文・写真



さと

ととさんが漬けている白菜を見せてもらう。漬けもの石をどかささと

ととさんの背後から樽のなかをのぞくと、白菜と水が入っていた。さととさんが11月に漬けた白菜をいただく。さつぱりとしていておいしい。しょっぱくもなく薄すぎでもない、ちょうどいい塩味だった。12月に漬けたものはまだ塩辛くて食べられないという。実家で食べている漬けものとは少し味が違うような気がする。一週間ほど漬ければ食べられると思っていたが、どうもそうではないらしい。このさつぱりとした塩味になるまでには一ヶ月ほどかかるそうだ。味付けは塩のみ。漬けるときには塩と水を入れるのかと聞いてみると水なんか入れないよ、と言う。

1月29日―白菜を漬ける

晴天。さととさんに聞いた話を思い出しながら白菜を漬けてみることにした。12時ごろ、半分に切った白菜の芯に切り込みを入れて、新聞紙の上に並べて干す。15時ごろに干した白菜を回収した。小さめのプラスチック製の樽と塩を用意する。押し込むように白菜を樽のなかへ入れて、塩を手で三つかみまんべんなく振り入れる。さら

にその上に白菜を重ねて、もう一度三つかみほどの塩を振り入れた。塩の分量がどうもよくわからないが、漬けもの石を乗せて作業を完了した。意外にも作業は30分もかからずに終わった。もつと手間のかかる仕事だと思っていたので拍子抜けしてしまい、これでいいのだろうかと不安になってくる。白菜が漬かるほど水がでてくるのか、味はしつかりつくのか、半信半疑だがようすを見ることにする。

2月2日、樽のふたを開けて、漬けもの石をどけてみた。のぞいてみると、白菜が水に浸っている。たいした手間をかけたわけでもないのに白菜が水に浸っていると、いう事実が嬉しかった。もう少し日がたてば、さらに水がでてくるだろう。塩を入れることで、白菜からでた水に漬かるから、漬けものなのだろうか。白菜が水に漬かったら、上下の白菜を入れかえて味をみながら塩を振り入れる漬けかえ作業をしよう。上下を入れかえることで味が均等につくという。塩の量が少ないとすっぱくなってしまうということなのでそれは避けたい。

2月6日―白い膜がはる

そろそろ漬けかえようと再びふたを開

けた。なかを見て失敗の可能性が頭をよぎった。白菜が漬かっている水の表面には白い膜がはっていて、白い泡も浮いている。漬けもの独特の鼻をつくような臭いが強くなっている。思い返してみればここ何日か部屋の暖房をつけっぱなしだった。原因はそれかもしれない。白菜の漬けものを冬に漬けるのは白菜が冬に採れるというだけでなく、気温が低くないと何日も置いていられるあいだに痛むからなのだろうか。失敗してしまったのだとうなだれながら、どうしようもなく廊下からベランダへ白菜を移した。

2月15日、さととさんに膜のはった漬けものの写真を見てもらった。編集室で失敗ではないかもしれないという話になったからだ。さととさんには食べてみればいいと言われ、戸惑った。あの白い膜のなかに手を入れるのでさえ勇気がいるのに、食べてみて大丈夫なのだろうか。一瞬そんな考えが頭のなかに浮かんだが、さととさんが平気な顔をして言うので家に帰って食べてみることにした。普段から見た目が良いものばかり口にはしていると、こういうときどうしていいかわからない。さととさんが平気な顔で、食べてみればいいと言えるのは、



1 白菜を干す。干すことで味がしみ込みやすくなるそう



2 白菜を樽のなかへ。今回は 10ℓ 用の樽を使用した



3 塩を振り入れる。分量は家庭によって違う。今回は手で 6 つかみ入れた



4 白菜の上に漬けもの石を置く。使用した石は 6kg



5 樽の 1/3 くらいの水が出てきた



6 表面に膜がはってしまった。手を入れるのは勇気がいる

自分の食べるものを自分でつくってきた経験と自信があるからだろう。

樽から取り出した白菜を良く洗って切る。少しばかりドキドキしながら口に入れた。味は少々薄いと感じたものの食べられないことはない。残りの白菜は一度樽を洗ったあと、塩を入れて漬け直してみよう。

みてきたこと

寒い冬にする仕事は、よし、やるぞ、と意気込んでやらなければ進まないと考えていた。じつさいに意気込んで白菜を漬けたが、やってみるとその意気込みを持って余ってしまうほどシンプルな作業で、仕事と言うよりも作業という表現のほうがしっくりする。複雑で難しいことこそ、いいものができると思い込んでいたようだ。手早く作業を終えて気長に待つ。寒くて動きたくなくなる冬にびったりの作業だ。待つあいだには白菜の変化を見ることが楽しみになった。できあがった漬けものをおいしくいってもらうことも嬉しかった。

母にも漬けたを聞き、作業の工程は同じでも各家庭で干す時間、塩の分量待つ時間、味が違うということに気がついた。シンプルな作業だからこそ、作業の工

程は各家庭に根づき、好みに合わせて独自の工夫を重ね、続けられてきたのだろう。畑に白菜がたくさんできたから。毎年漬けているから今年も。そういった簡単な理由ですぐに漬けることができる漬けものは、続けようとして続けるものではない気がする。

振り返ってみると、漬けものが好きで、小さいころからよく食べていたのに、漬けた白菜の変化も知らなかった。そういつたものが身の周りにはたくさんある。料理や花の育てかたもそう。完成されたものだけを見ている、そこからみえるものはわずかだ。じつさいにやってみることで、完成に至るまでの変化や過程を知り、新たな発見や感覚が私自身の糧となっていく。白菜を漬けてみるという体験は、漬けるものをより身近なものにした。知っているつもりになっている言葉を辞書で調べ、新たな意味や本当の意味を知ったときにその言葉がぐっと自分に近づくような感覚と同じだ。体験の積み重ねによって、さとるさんのような勘が身についていくのだろう。だから私は、一つひとつの体験を大切に、体験からみえてくるものと向き合っていきたい。

ちいさな博物館の冬仕事

夏休み前にセミの抜け殻標本箱をつくり、本誌71号の時に魚の骨格標本をつくり、私は標本として「残しておくこと」の意味が、なんとなく分かったような気がしていた。

ものを残しておくには、ほかにどんな方法があるんだろう。聞くところによると、湿度や気温が低い冬は、カビが生えにくかったり、虫が湧きにくかったりするため、動物のはく製をつくりやすい時期なのだそう。今回は鳥類と哺乳類のはく製づくりに挑戦した。

持田睦乃(社会学科3年)=文・写真・イラスト

今回つくったのは「仮はく製」だ。台の上でポーズをとっているような「本はく製」とは異なり、内蔵や肉などの腐りやすい部分を取って、なかに綿を詰めたはく製である。

「はく製を作ってみよう」とは思うものの、私にははく製づくりの技術も知識もない。そのため、二回のはく製づくりではどちらも専門的な知識のあるかたに教えてもらいながら作業を進めることにした(簡単な工程と、はく製にした生きものについては、次のページに図とともにまとめた)。

仮はく製をつくってみる

1月8日にシロハラの仮はく製をつくった。簡単な作業だと聞いていたので、初めてとはいえそんなに時間はかからないだろうと、少々たかをくくっていた。

だがやってみるとすごく難しい。野生の鳥を触る機会などなかったので、皮と肉を離す単純な作業でもとても複雑なものに感じた。慎重に進めていったため、一つのはく製を作るのに丸一日かかってしまった。そのうえ途中で背中が少し破けてしまう。最後の仕上げでどうにか隠せたが、背中が少し乱

れている。「きれいにできてよ」と言ってもらえたし、はく製を見て愛着を感じる事ができたが、次こそは失敗なくきれいにやりたいと思った。

この一ヶ月後の2月9日、ハタネズミの仮はく製づくりをした。すでに一度経験しているので、それほど緊張もなかったし、作業のなかで戸惑うことも少なかった。それでもまだ時間がかかる。作業中に皮が乾燥し縮んでしまったため、綿を詰めて縫うと、隙間から綿が見えたままになってしまった。

鼻すじの毛並みが少し逆立って残念だけど、手に乗せればかわいいネズミに見える。誰かに見せたい、見せたらどんな顔をするだろう。

なぜ、「残したい」のか

魚の骨格標本をつくったときにも考えたことだ。そのとき考えていたのは、「自分にとつての『比較対象』をつくりたいから」ということだった。今回もそれはもちろんあった。でも何か違う。私は完成したはく製を見て、「ほかの人に見せたいな」と思った。仮はく製は私がつくったもの。壊れやすい骨格標本

仮はく製作成日：2012年1月8日／作業指導：西教生さん

シロハラ：大きさおよそ25センチメートル、本州以南の平地や山地に生息

2010年3月、本学コミュニケーションホール西側で編集部員が死体を拾い、その後冷凍保存

【シロハラの仮はく製】

① シロハラの前測。全長、尾の長さなど、記録用紙に細かく記入する。



ミリ単位で測る

② お腹の羽毛を掻き分け、皮にメスを入れる。破かないように気をつけながら、皮を剥がす。



羽毛を血で汚さないように注意する

③ 途中で脚の関節と、翼の上腕骨を外す。皮に残っている骨の周辺の肉を、そぎ落とす。



図は脚の関節

④ 眼球など、腐りやすい部分を取り除き、皮の内側にミョウバンと木ウ酸をすり込む。



破けてしまったところから羽毛が覗いていた

⑤ 竹串を芯にして脱脂綿を入れ形づくる。きれいに縫ってとめ、乾燥させる。



縫い目はお腹の羽毛で隠す

仮はく製作成日：2012年2月9日／作業指導：北垣憲二さん

ハタネズミ：大きさ10～14センチメートル、農耕地や造林地に生息

2011年10月、やまびこ競技場付近で編集部の卒業生が死体を拾い、その後冷凍保存

【ハタネズミの仮はく製】

① ハタネズミの大きさに合わせ脱脂綿をちぎる。



頭の大きさに合わせてひねる

② みぞおちの辺りから肛門辺りまで、内臓を傷つけないように開く。



中身を切らないよう注意する

③ 前足と後ろ足の関節と、尾を外しながら鼻先まで皮を剥がし、皮と手足だけの状態にする。皮の内側にミョウバンをすり込む。



皮を裏返したところ。残った肉を取り除く

④ 唇を縫ってとめる。口からピンセットで絞った脱脂綿を詰める。きれいに詰め終えたらお腹を縫ってふさぐ。



皮を強く引っ張らないように注意する

⑤ 形を調整しながら段ボール紙にピンでとめ、刷毛で毛並みを整え、乾燥させる。



はく製にはピンを刺さないで固定する

と違い、長期にわたって保存ができ、ほかの人に触ってもらうことができる。ふだん触る機会があまりないような生きものを触ってみたら、みんなはどんな顔をするのだろう。どこに目を向けて、どんな興味をもつのだろう。それを聞いてみたい、私を感じたこととどう違うのか、どこが共通しているのか知りたい。はく製づくりで、私は今まで知らなかったことを多く知ることができた。力強く飛ぶ鳥の皮膚のもろさも、野生の鳥に肉があまりついていないことも、不安になるくらい小さな体のハタネズミにしっかりとした歯や爪が生えていることも。知らなかったことだらけで、少し目まぐるしいくらいだった。知っていく過程が楽しくて、生きものの血が恐いとか、気持ちが悪いか、そういう感情はまったくなかった。図鑑にも載っていないことを、私は知り始めているのだと思うとうきうきした。学術的な難しいことは分からない。だが私が経験して感じたことを、実物を通してなら自分の言葉で鮮明に伝えることができる。私はそのために、「残して」いきたいのだ。自分の好奇心が、誰かの驚きや発見のきっかけになる瞬間のために。

高速道路の 雪かき

私は帰省するときに東富士五湖道路をたびたび利用している。チェーン規制の字を見るたびに、早く何とかしてほしいと思っていたけれど、誰がどうやってあの雪を片付けているのだろう。私の知らない仕事の裏側をのぞいてみた。

大澤かおり（社会学科3年）＝文・写真



「三つ折り」の刃を広げたところ

雪

かきのアルバイトがあると聞いたとき、私はどこか牧歌的な情景を思い浮かべていた。スコップを手に、

せつせと雪を道の端に寄せ、時折思い出したように伸びをするような。だから、柴崎利春さん（50）から、作業のようすを取めた写真を見せていただいたときはとても驚いた。大きな刃の付いた黄色い大型車——除雪車だ。

1月17日午後4時ごろ、河口湖のインターチェンジに向かった。今年の冬はほとんど雪が降っていないかったのに、昨晩はまるで取材を見計らったかのように雪が降り積もった。都留ではあつという間に解けてしまったけれど、まだこの辺りには積雪の名残が見受けられる。

11月から3月まで東富士五湖道路では雪かきがおこなわれている。区間ごとに担当があり、河口湖から静岡県小山町須走^{すほしり}までが柴崎さんたちの担当だそう。アルバイトは日替わりの当番制になつていて、夕方の5時から翌朝の8時まで、路面の状況をうかがいながら待機している。天気予報通りであれば、それ

ほど苦しい仕事ではない。けれど、今回のように天気が急に変わり、雪が降り出すこともある。そうなるとのんびりしてられない。当番ではない柴崎さんも「呼び出し」を受けて、朝から雪かきの仕事をしていった。「最近だとこんなふうには天気予報が外れるのはめずらしいね」。柴崎さんは苦笑しながら言った。

インターチェンジ横に建てられている大きな車庫と小さな詰所^{つめしょ}。ここが、柴崎さんの冬仕事の拠点となる。除雪車は、大きな一枚刃が「ワンウェイ」、刃を折りたたんで収納できるのが「三つ折り」と呼ばれる。三つ折りを車庫から出して見せていただいた。折りたたんでいた刃を開くと、車体の幅よりもずっと広くなる。高速道路を走らせると、一車線の道幅いっぱいになる長さだ。「じつさいに乗せてあげたら」と作業員の1人が声をかけてくださり、助手席に乗せていただいた。ドアの近くに設けられた足場を踏み台にして、助手席へとよじ登る。大きさによってはハシゴで登らなくてはならないものもあるのだとか。運転席から見

右：「三つ折り」を運転する柴崎さん／左：雪かきをした後に路面が凍結するのを防ぐためにまく、塩の袋。1袋 1000kgの塩が入っている。倉庫は2階建てになっており、袋をクレーンで釣り上げ、除雪車に塩を積み込む



た風景は、私がいつも見ているものとは全然違う。高い位置から遠くまで見渡せるけれど、足元のようにすはまったく分らない。この視界で道幅いっぱい刃を操りながら動かすのだから、より慎重な運転が求められるだろう。

詰所では昨日の晩から働き詰めだった人たちが、テレビを見たり仮眠をとったり思いおもいの形で休息をとっていた。仕事自体は一段落したようなのだが、大雪警報が解除されないと解散はできないらしい。午後5時半ころに大月の事務所から、警報が解除されたと連絡が入った。私たちはこの日の当番の人たちと入れ替わるように、河口湖を後にした。

柴崎さんはこのアルバイトを始めて5年目。この職場では、もう10年以上続いている人もいるのだとか。大型自動車免許を取得している必要があるため、20代の人はほとんどいない。「もつと若い人が入ってきてくれればいいんだけどね。」

* * *

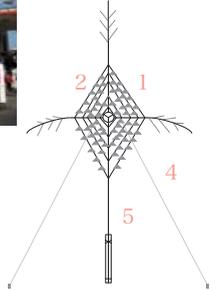
私の出身である静岡県では雪はめったに降らない。たとえ降っても積もらずにすぐに解けてしまう。だから、私にとつての雪は楽しいもの、素敵なものだった。雪が降ってくればおおっと歓声を上げたし、珍しく積もれば家族や友達と一緒になつてはしゃいだ。都留に来て雪国の冬を経験して、初めて雪が楽しいばかりではないということを知ったのだ。厚く積もった雪は、道を塞いで人の生活を妨げ、時には命の危険もある。雪かきが仕事として成り立っているのも、それが人の生活のために必要だからだろう。

機械の発達によって、雪かきを大規模におこなえるようになったとはいえ、雪とどう付き合っていくかは、昔も今も難しい問題だ。楽しいだけではないと知ったけれど、それでもやっぱり私は雪を見ると心躍らせずにはいられない。人の邪魔にならないように、ただよけるだけではなく、もつと雪と共生していけるような方法を考えられないだろうか。自分が知らなかった仕事から、新しい思考の広がりが生まれてきた。

十日市場

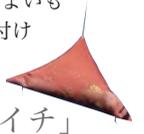


十日市場 1月9日撮影 ガソリンスタンド前と
小篠神社の広場の2ヶ所



1 縄を張ってつくられた5重のひし形は、神様のたくさんの「目」を表しているという。三角形の飾り「ヒイチ」：火打ち袋のこと。火除けの意味がある。山に行くときは山の神さまが怒るので、マッチではなく火打ち袋を持っていった。藍染の布でつくった小さな三角形の袋。なかに火口（もぐさと火薬をまぜたもの）と火打石（石英）を入れ、袋の端に取り付けられたひもでくるくる巻き火打ちがねをはさんでとめた。藍には、マムシを寄せ付けられないことから魔除けの意味がある。／バケツやかご：本来はなく、最近取り付けるようになったものだそう。「よいものがたくさん入るように」という意味が付けられているようだ。

【図中の番号は解説と対応】



「ヒイチ」

小正月の「飾り」

あるときふと目に入る、街角に現れるさまざまなしるし。何かの儀式なのだろうけれど、その色や形以外は何もわからない。異世界との接点、目に見えないものへの信号。そんなふうに見えていたものが、その素性を知ることでもまた違ったものに見えてくる。小正月の前後、あちこちに現れる「飾り」について知りたくて、探しに行った。

香西恵（社会学科3年） 文・写真



道祖神は辻に立てられ、悪いものが入ってくるのを防ぐ。旅の安全を守る神、五穀豊穡の神であり、「村の守り神」だ。小正月の道祖神祭りでは、その依り代として大きな「飾り」（梵天竿、ご神木などという）を立てる。一年の健康や豊作、子孫繁栄など、さまざまな願いが込められる。

どうしてこのようなものを立てるのか。「飾り」を見つけると、一体これは何なのかという驚きと、よく分からないものへの畏敬の念が湧くとともに、それを立てる人々の思いが知りたくなる。何かはつきりとした御利益があるわけではない。むしろこれだけ大掛かりなものをつくるのは大変なことだろう。それだけに、そこへ向けられた思いに強く惹き付けられる。

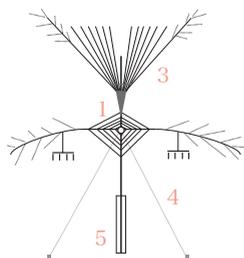
かたちに込められた意味を解くことは、その思いを知ることにつながると考えていた。けれどもじつさに調べてみると、さまざまな意味づけがなされていることを知ることはできたが、なぜそれをするのかが分かったとはいえないかった。そこには意味づけからこぼれ落ちる、人が寄せるかたちのない思いがある。ひ



小野 1月15日撮影(西教生)
小俣製材所をすぎて都留文科大学附属小学校までの川沿い右岸にひとつ立っていた。子どもの習字が吊るされる

宮原

みやばら 宮原 1月17日撮影 田んぼ脇



3 梵天竿先端の竹12本の飾り(オヤナギサン)のとりつけかた(放射状)には、四方八方から魔を防ぐという意味が込められている。12という数は12ヶ月を表し、「一年中」の意味がある。うるう年には13本取り付け

4 四方にむけて素縄を張り端は杭で止めて、梵天竿が倒れないようにした。4本の縄は四方(東西南北)を表し、すべての方角から悪いものを寄せ付けないという意味がある。

5 柱に使う木はおもにスギやヒノキ。スギ:まっすぐ、素性がいい/ヒノキ:「火の木」。昔は火をおこすのに使われたことから。火除けの祈りが込められる。



道祖神に取り付けられた五色の紙垂は、五行を表し、一年を表す(青:春、赤:夏、黄:土用、白:秋、黒(紫か緑):冬)。各側面に3箇所ずつ、計12箇所とりつける。(うるう年は正面に4箇所ので、計13箇所)

法をもう少し探ってみたくなった。

「目に見えない」ものが気になって、その正体を確かめようとした。けれど違う関係の持ちかたもありそうだ。その方法をもう少し探ってみたくなった。

ひとつの答えが見つかるものではなさそうだった。

けれども、それを突き詰めることはあまり重要ではないのかもしれない。「飾り」に込められた意味も、あとから付け加えられたり、立てる人によって違う解釈がなされたりしていた。中身が変わりながらも続けられているようですがおもしろい。続けることそれ自体が大事なのだ。

目に見えない不確かであまいまいの。けれど、確かにあるもの。「飾り」として姿を与え、目に見えるものに現すことで、そうしたものがあつ、ということを確認することができる。たとえそこに込められていた中身は失われたり変わったりしたとしても、何か、そこに込められているものがあるのだということに、「飾り」を立てるたび、見るたびに気が付くことができるだろう。また、あいまいだからこそさまざまな人が思いを重ねられ、その存在が残ってきたのかもしれない。

やすとみかずお

渡邊さとゑさんのまゆだんごづくり
(2011.1.12) / 右下：十日市場の水
路で見つけた、水神様にお供えされ
たまゆだんご (2011.1.14)



両脇にカキとクリの枝を添え、フジ
のつるで縛る。これは「フジ(富士)
の山ほどカキ(掻き)取ってクリ(繰
り)まわしがよいように」という意
味らしい。以前聞いたものとは少し
違う(71号参照)。お話を聞くたび
に関心は尽きない。(香西恵)

特集：冬仕事

風景に見つけた冬仕事

外を歩いていて見つけたこの季節ならではの風景。
そこに込められた意味や役割をたどっていくと、変
わっていく「冬仕事」の姿が見えてきました。

本誌編集部=写真

まゆだんご

まゆだんごはお蚕の繭を模した紅白の団子を木
の枝にさしたものだ。小正月の前に各家庭でつ
くり、一年の豊作や健康を願う神様にお供えする。小
正月におこなわれるどんど焼きで、これを焼いて食べ
る。団子をさすのに使う木はヤマボウシと決まってい
る。なにか理由があるのだろうか。「飾り」の意味を
うかがった(前頁参照)安富一夫さんによると、ヤマ
ボウシは「ダンゴバラノキ」と呼ばれる。花に大きな
白いガクが4枚十字につくようすから別名「四照花^{ししょうか}」
ともいい、四方を照らして、悪いものを寄せ付けな
いという意味で使われるそうだ。今はまゆだんごをつく
る人も減り形も小さくなっているが、昔はもつと大き
くこしらえたという。中心にヤマボウシの枝を置き、



東

桂から十日市場へと下りていく坂の
途中に、渡邊宗男さん(81)の田ん
ぼがある。そこで秋から冬のあいだ、ぼこ
ぼこと生えてきたかのように重ねた藁が現
れる。藁堆^{わらたい}というらしい。東ねた藁を斜め
に積み重ねることで雨や雪を流して、藁を
乾いた状態で保管できる。遠くから見たと
きはまたげるくらい大きさだと思ってい
たけれど、近づいてみると首まで届くほど
の高さがあり、意外と大きい。重ねた藁の
束のうえには藁を編んで作った笠が乗って
いる。俵をつくるときに使う「俵編み」と
いう編みかただそう(左写真)。こうして
冬を越す藁は堆肥、草鞋作り、苗床の覆い
などいろいろなことに使われる。藁は秋冬
の馬の餌としても使われていたため、戦前
は馬を飼っている人の畑でよく見られた。昔の写真を
見てみると、形も大きさもまったく違う藁堆が写って
いる。これからの藁堆の姿はどうなっていくのか、見
届けていきたい。(天澤かおり)

藁堆 (わらにお)



右：戦前のものらしい藁堆。右手の
人物と比べるとかなり大きい(『奥隆
行写真コレクション』より) / 左：
渡邊さんの田んぼにある藁堆を見せ
ていただいた (2012.2.10)



冬仕事

特集を終えて

冬にしかできないこと。冬にやりたいこと。

私たちはこれを「冬仕事」と名づけ、じっさいに人に会い、近くに行ってよく見て、それから自分たちでやってみました。

なぜ冬にやるのか。ただの風物詩ではなく、仕事であるのは、それを冬にやらなければならない理由があるからです。見ているだけでは「風景」に過ぎないけれど、近づいてみると「仕事」として見えてきます。

冬仕事は「次のため」の仕事です。

生活をつづけるために雪をかく。
これからの一年の無事を願ってお祭りをする。
とったものを別のかたちで使うために、少し手を加えておく。

どれもが、これから先に思いを寄せてすること。
冬仕事とは、秋がおわって春が来るまでの、あいだにすること。
「仕事」とおして、めぐる季節のなかでの「冬」が見えてきました。

そして「冬仕事」とおして、都留という地域が見えてきました。
同じ「冬」でも、地域によって仕事はさまざま。
私たちは「冬仕事」を探るなかで、どれもが都留ならではであることにあらためて気づきました。

仕事から冬を見る。「冬仕事」から地域を見る。
私たちが眺めている景色のなかには、まだまだ「冬仕事」がありそうです。

起き上がる朝

——とことん関わる教育——



撮影・石川あすか

「自分の目で見たり、考えたり、表現したりすることは、とても大切で、そこに生きている しようこ みたいなものだ」——『詩集たんぼほ』より「遠藤先生」が子どもたちに向ける眼差しはいつもあたたかい。都留市で長らく教員をしていた遠藤静江さん（79）のお話を数回にわたって紹介します。今回は遠藤先生が子どもと親と、とことん関わったお話です。

だ

けどね、やっぱり人間の付き合いつていうのはね、とことんね。今とことんしてないじゃないの。子どもの時から喧嘩もしないでしょ。やっぱりね、とことんして欲しいね。

だからあたし学級のなかでね……。Nちゃんっていう男の子がね、お腹痛くなつて保健室行つたの、それで休み時間にわたしが見に行つたの。そしたら一緒にいた子がね「先生Nちゃんね、洋服の下になんにもシャツ着てないよ」ってこう言つたの。「Nちゃん、なんでシャツ着てないの、こんな寒いのに」って言つたら、「お母さんがどっか行つちやつた」って言うの。着るものがわからなかつたんですよ。それでね、その家に放課後「ごめんください」って行つたらお父さん

が出てね、それでお父さんに、「お母さんどうしたんですか」って言つたら、「どこ行つたかわからない」って言うの。だから怒つたよ、お父さんに。「お父さんね、今日Nちゃんがお腹が痛いつて言つたけどね、下になんにも着てないんですよ。この子どもを育てるにはお母さんがどこ行つた、じゃ育ちませんよ。見つけてください」って言つたの。

とことん関わる



その次の日は保存食持つて行つたの。そしてらね、家のなかにいっぱい人がいるの。「なんですか」って言つたら、「ここのおじいちゃんが危篤だ」って言うの。その家で一番大きいお姉ちゃん呼んで「お母さんどこ」って言つたら「横須賀の妹のどこ行つ

てる」って。お母さんに電話して、「おじいちゃん危篤だつてよ。あんた今日帰つてこなきゃね、あんた一生この家へ戻れないよ、帰つてきなよ」って。そしたら「わたしは家を出てから一人で食べてかなきゃならないからヘルパーさんみたいな役をして金曜日までその家のお年寄りみなきゃなんないから帰れない」って言つたから、「あんた、じゃあ覚悟しなよ、もし亡くなつたらあんた戻れないよ」って言つたの。それでお母さんは戻つて来なかつたの、たしか。だけどおじいちゃんはずを越えて助かつたの。

次の日、学級だよりにNちゃんの家が今こいういう状態だから着れる物があつたらみんなくれないって。子どもたちがいっぱい、着る物など学校へ持つて来たのよ。それをまた届

→集の最後のページで「うれしかったこと」として本文中「喜びの輪が広がる」の出来事に触れている。本文中の絵は遠藤先生が詩集や学級通信に描いたものである。右上写真は詩友会（本誌38-39頁）のようす。左が遠藤先生。

たんぼぼ

一ばんさきに春をつげる花

それはたんぼぼ

土にはらばい

さむい北風を

じっとたえてきた花

たんぼぼが

お日さまのように

かがやいているのは

そのせいだ

こくごでべんきょうした

『たんぼぼのちえ』

みんなの目の中にも

たんぼぼがさいている

あかるく

かしこい子になろう

わたげになる目を

むねにいだいて



『詩集たんぼぼ』より遠藤静江作



けに行つたの。

学級のお母さんたちにはこう言つたの。Nちゃんの家みたいなのは大人の社会ではあることよね。だけどみなさんは、影でそれを囁くでしょつて。それで助け合いになる？

ならないでしょ。積極的にそういうことを理解して、助け合いましよう、みんなですることじゃない、隠してもばれることですよ、ね。この学級は、学級集団は、みんなで助け合つていかなきゃ、子どもは育たないよつて言つたの。プライバシーなんてね、そんなね、かつこいいこと、よそうよつて。何がプライバシー？ ね、そうじゃないでしょ。だつて大人の社会にはあることじゃない。離婚もあるしね、喧嘩もあるし、ね。でも、そのなかから子どもを守るのがあたしたちの役目でしょ。だからやりましょ。

喜びの輪が広がる

それからNちゃんのお母さんも戻つてきたの。そしてお母さんは新聞配達したりいろいろしてね。

あたしがね、『山梨日日新聞』へ学級の子どもの詩を投稿させてたの、学級全員のね、

一年間のうちに学級全員ができるように。それが載るとね、Nちゃんのお母さんは新聞に載つた子の家へ新聞を配つて歩くの。その家でとつてる場合もとつてない場合もあるの、『読売新聞』とつたりしてるから。それでとうとう一年たつたときにね、子どもの詩が全部載つた。それを全部印刷して一冊の詩集をつくつたの。

教育つていうもの。あたしの考え方はね。学校のなかに留めとくものじゃないのね。親も、家庭も、地域も、みんな育てていくものだとわたし思うの。ほんと。社会つていうもの自体がそういうものだとはほんとは思うの。うん。それでちゃんとね、そういう所を通つてくればお互いが理解できると思うの。



遠藤静江さん
(えんどうしずえ)

自己紹介：大好きなこと、詩をかいたり絵をかくこと。もちろん子どもたちが大好きです。特徴は桃太郎さんが年とつたってかんじの髪型。その他知りたいことは聞いてくださいね。——『詩集 たんぼぼ』より

上の写真(黄緑色の表紙)は『詩集 たんぼぼ』。昭和62年度に禾生第二小学校の二年生が書いた詩をまとめたもの。遠藤先生がNちゃんの妹の担任だった年にまとめた詩集である。一人ひとりの詩に遠藤先生が言葉を寄せている。遠藤先生は詩



ひろいもの 3. 鳥の巣

昨年12月から今年1月にかけて
3つの鳥の巣に出会った。「ひろ
う」とは「手に取る」とは何なのか。
巣との出会いをとおして考えた。

香西恵（社会学科3年）＝文・写真

① 2012.1.16 中屋敷フィールド
で採集 採集者：香西恵

【巣を見て分かったこと】番号は3つの巣と対応

①巣材：枯れた細いツル、ササの葉、ビニール／大きさ：外径14cm×14cm、内径8cm×8cm、深さ4cm／②巣材：裂いた樹皮、ビニール、枯れた細いツル、ササの葉／大きさ：外径13cm×14cm、内径9cm×8cm、深さ4.5cm／③巣材：枯れた細いツル、ササの葉、落ち葉／大きさ：外径12cm×14cm、内径9.5cm×9cm、深さ4cm
3つの巣を比べると、巣材の特徴、巣のつくりの粗さの違いが分かった。②はもっとも巣材の組みかたが細かく、ぎっしりしていた。巣材に樹皮が使われていたのは②のみ。③にはビニールはなく、あとから積もったものかもしれないが、底に枯れた松葉がたくさんあり、広葉樹の枯れ葉もツルのあいだに挟まれていた。

② 2011.12.17 尾崎山で採集
採集者：西丸堯宏
営巣環境：コナラなどの広葉樹林
5mほどの高さの枝先



うどそれは私が別のものを指差した、すぐそばにあった。私にもその巢は視界に入っていたはずなのに、なぜ気がついたのは別のものだったのか。一人では見つけられないものがあるということを意識した。

12月17日、本学卒業生の西丸堯宏さんから巢をもらう（写真②）。尾崎山

で「木をゆすつたら落ちてきた」。巢材をみたり、巢のつくりを調べたりして、標本にしてもいいし、飾ってもいいとのこと。そんなふうに簡単に見つけられるものなのか・手に入るものなのか？ 疑問を抱くいつぼう、巢をもらったのがともうれしかった。今まで巢に漠然とした興味はあつても、ただ見つけるといふこと以上に、その先——それを採るとか、調べるとかは考えたこともなかった。自分も見つけてみたい。自分で手に入れてみたくなる。

12月19日朝7時半、うぐいすホール横から入り栗山公園に下りるルートで山を歩く。簡単に見つけられるとは期待していなかったが、山を下りているときに、一緒に行った砂田真宏さんが巢を見つけた（写真③）。ちょ

1月16日午後2時半。十日市場の散歩の帰

り、麦のようすを見に行つた中屋敷でたまたま巢を見つめる（写真①）。葉の落ちた広葉樹の、3mほどの高さの枝先にひつかかっていた。ゆすつたら落ちてきた！ 思いもよらない収穫におどろく。

これまでわたしにとつてのひろいもの、というとたまたま出会うというのがほとんどで「ひろいもの」という言葉もそうした出会いを指して使っている、意識して何かを見つめたいとか、手に入れようとして歩いたり探したりすることはなかった。

予期せぬ出会いもとびきりうれしいものだけれど、見つけようとして見つかるということには別の喜びがある。その出会いかたによつて、見えてくるもの、関心の広がりかたは違ってくる。

人からもらう、という出会いかたも特別だ。自分にはない、もののみかたを知る。自分だけでは目に入らないものごとに出会わせてくれる。今までもきつと見えていたのだろう。けれど、それをそれとして認識していない。よく人と並んで歩くと、見えているものが

違うことに気が付く。同じ道を歩いて、同じ

ものが目にはいつていたとしても、目に見えているものなから何に気がつくのかというところが、つくづく違うのだ。

ひろうということ。ただ見つけて通り過ぎるのではない、手に取るという行為は、そのものに関わろうと一歩踏み出すことだ。鳥の巣を採る、という行為はさらにもう一歩意識的に、そのものに近づこうとすることだった。鳥の巣はただ落ちてくるものをひろう、というわけにはいかないからだ。なぜ採りたいのか、本当に採りたいのか、自分に目を向けることになる。

そこから見えてくるのは、自分に「見えているもの」は何なのかということ。何が見えて何が見えていないのか。そして見たいのか。自分の「目」については、まだまだ分からないことばかりだ。



③ 2011.12.24 尾崎山で採集（撮影日：12.19）採集者：砂田真宏 ツルが絡まっており、高枝切りバサミで枝ごと採集

H・D・ソローが『ウォールデン 森の生活』（今泉吉晴訳、小学館）で示唆した散歩のほんとうの意味とは何か。散歩をとおして見えてくるものとは。私たちは歩くことで、変貌する自然やまちの今を記録し、フィールド・ミュージアムのたのしみを報告していきます。今回は都留市内の生きものの情報と、“まちの記憶コレクション”にくわわった「山本書店」をご紹介します。

アズマモグラの死体

2012年1月18日 都留文科大学1号館裏

本学1号館裏でアズマモグラが死んでいるのを見つけました。体には1.5cmほどの古い傷がありましたが、死因との関連は分かりません。死体という少し敬遠されるかもしれませんが、しかし、死体を見つけたからこそできることがあります。今回、このアズマモグラを仮剥製にしました。仮剥製を作る過程では、アズマモグラの体のつくりをじっくりと観察することができました。ただ、野生動物は病気や寄生虫をもっていることがあるそうなので注意が必要です。

(初等教育学科3年 砂田真宏)



飛翔中のクマタカ (撮影・北垣憲仁)

クマタカ

2012年1月26日 都留市十日市場

都留市十日市場の桂川の近くで、2羽のハシブトガラスに追われているクマタカを見つけました。このクマタカは地上から約20mの高さを飛び、右岸のスギ林のなかに入って姿が見えなくなりました。都留市内ではまれにクマタカが高空を旋回していることはありますが、それは山の上に限られます。地上付近には出現しませんし、人家や国道、線路が近くにあるようなところには出てきません。今回、市街地でクマタカが見られたのは、23日の降雪によって山では食物が捕りにくくなっていたからかもしれません。

(西 教生)

越冬中のテントウムシ

2012年2月8日 都留文科大学 自然科学棟非常階段踊り場

自然科学棟の非常階段で越冬しているテントウムシを見つけました。風が当たらない壁の隅っこに、数頭から数十頭が固まっていた。壁の上のほうよりも下のほうに多くいました。子どもの頃、石の裏に虫がたくさんいたのを見たことを思い出し、踊り場にあったブロックをどかすと、その裏から百頭近く見つかりました。大学内では自然科学棟のほかに、本部棟と2号館、3号館にもテントウムシが越冬に来ていました。

(地域交流研究センター職員 今泉圭一郎)



左のブロックをどかすと、テントウムシが越冬していた

*中屋敷フィールドでは、赤外線センサーカメラを設置して動物の調査をしています。下の写真は、2011年12月に撮影された動物たちです。



ノウサギ 2011年12月15日
都留市内のノウサギは、夏も冬も同じような色をしています。雪の多い地方のように、白くはなりません。



キツネ 2011年12月19日
この写真は、午前8時に撮影されたものです。明るい時間帯も活動しているようです。



コジュケイ 2011年12月25日
水場の近くで、2羽撮影されました。コジュケイは中国から人為的に持ち込まれた鳥です。



ハクビシン 2011年12月27日
ハクビシンは夏場にはよく写るのですが、冬に確認されるのは珍しいことです。



アカネズミ 2011年12月28日
このアカネズミは、右のキクガシラコウモリが飛んでいた洞窟内で写りました。



キクガシラコウモリ 2011年12月28日
手彫りの洞窟のなかにカメラを設置しています。冬場も動いていることがわかりますね。

谷の町・史の里 都留市高尾町通り 山本書店 ①

～都留大生の学びを支える～



山本書店 (写真1)

2011年暮れ、
都留文科大生がフィールド・ミュージアムの
「まちの記憶コレクション」に
あらたな記憶が加わりました。

そ

こだけ周囲の風景から浮き立つような店構え。都留市高尾町通り（都留市中央1丁目3-19）、「山本書店」【写真1、2】。とくに昭和時代の都留大生にとってはなつかしい名前だろう。

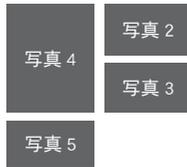
山本書店は、昭和20年代中頃、戦地から復員した故山本國雄（やまもとくに）さんが開いた書店である。

首都圏への交通事情や物流が今のようにならないうちに、ネット通販で本を購入するななど考えもなかった時代、学生が研究に必要とする専門書は、急ぎならば自分で東京に買いに行き、あるいは時間がかかっても市内の書店経由で取り寄せてもらうしかなかった。そんな時代に山本書店は心強い味方だった。山本さんは週に数回、注文があれば一日おきに列車で東京神田の出版取次まで直接出向き、顧客から依頼された書籍を買い付けてきた。きょう注文すれば早いときには翌日の夕方にはほしい本を手にすることができた。この商習慣は長男の史雄（ふみお）さん（45歳）が家業を継いだ後も続けられ、どれだけ多くの都留大生が山本書店のお世話になり卒業論文を書いたことだろう。その山本書店は数年前に閉店し、昨年暮れにはご家族も都留を離れてし

まったが、今もまちの人びとの記憶に残る「本屋さん」である。

2011年12月、私は偶然市内で山本史雄さんに出会った。職業柄、山本さんには二代に渡りお付き合いをさせていただき何年かぶりの再会であったが、聞けば引越しをするという。そのとき私の頭には以前、都留大のT教授とフィールドワークならぬ市内散策をしたときのこと浮かんだ。——夕闇の高尾町通り、私たちは山本書店の前に立つて昭和レトロのなつかしい雰囲気を残す店構えを鑑賞していたが、教授は突然、すでに商売を畳んで戸締めをしていたドアをこじ開けるように「侵入」。私は慌ててすでに使われていない帳場の奥にいらした山本さんに言い訳をし、中を見学させていただいた。時が止まったような店内【写真3〜6】に教授は興味津々、「おもしろい、おもしろい。今時こういう本屋は貴重だよ、貴重だよ」を連発、分けても店内に残っていた「若波文庫」の看板【写真5】が気に入ったようで、私が制しなければいけないうちで持ち帰り研究室に飾っていたらどう。（教授にはまちなかで集めた飲み物の空瓶を研究室に飾る癖がある。）——この高尾町

通りと通りに平行して走る国道139号に沿う一帯は、かつて「南都留郡」の郡役所が置かれた「谷村町」の中心で、いわゆる「町場」としてにぎわっていた(※1)。大正初期には町内に「床屋文庫」という本の貸出しシステムを備えた理髪店が7軒あったと記録に残り、昭和初期には町民有志のよびかけで現在の市立図書館に連なる『(私立)谷村図書館』がつくられた(※2)。そして短期大学を



経て1960年に四年制となった都留大が昭和40年代に現在の地に移転する以前は、高尾町通りの先、現在の市役所の敷地内に大学があつて、この通りを学生たちが行き交っていた。長く都留大生の学びを支えた山本書店の記憶を何か形で残したいと思つた私は、思わず「お店の看板を下さい！」と口に出しそうになつた。しかし屋号や看板は店にとつて大事なもので、今後も大切に保存されるのだろうか、失礼になつてはとこらえた。しばし思い出話をして「それではお元気で」と言つて別れたが、あきらめがつかない私は、その夜のうちに山本書店の近所に住み私の良き相談相手であり、また都留大フィールド・ミュージアムとも親交の深い市民の方(※3)に昼間の話をしたところ、「本当に必要な本は山本書店で買った。山本さんでしか手に入らない本もあつた」と山本家の移転を惜しんでくれた。「お店の看板はどうなるのだろう？」と持ちかけると、「まちの大切な記憶として大学のフィールド・ミュージアムで保存していただけるといいですね」と助言してくれた。勢いづいた私はすぐ山本家に連絡、外出中の史雄さんと連絡がとれたのは翌々日だったが、恐

る恐る希望をお伝えしたところ、「どう処分しようかと迷つていた」とご快諾をいただいた。数日後、やはり山本書店にお世話になつたという都留大フィールド・ミュージアムの北垣憲仁先生と共に再訪し、かつて帳場で上品に接客してくださった先代國雄さんの奥様にもお目にかかり、ご主人の思い出話などをうかがつた。そして暮れも間近の12月20日、山本書店の屋号や看板類、店内の椅子とT教授のほしがつた(?)岩波文庫の看板は、北垣先生の手でフィールド・ミュージアムに引き取られ、撮影された店の写真と共に保存されることになつた。(つづく)



山本史雄さんと山本書店のもう一つの顔のバイク (写真6)

(※1) 『町場の近代史』、松本四郎著、岩田書院、2001

(※2) 『地域交流センター通信』No.11、「図書館のあゆみ展」、2007

(※3) 同上 No.13、「人・町・自然をつなぐ地域交流研究 プオーノ写真展示」、2008

インタビュー 南都留森林組合

後編

木を伐る、その現場

いったい、都留の山はだれにどのように手入れをされているのだろうか。71号では、南都留森林組合 参事こばやしたくやの小林卓也さん(40)から、同組合が3年前に運営体制を一新したことや小林さんの林業という仕事にける思いについて取材しました。後編となる今回は、「山」に入り、その仕事と出会ってきました。

崎田史浩(社会学科3年)=文・写真



木を見上げ、どの木を伐るか考えている吉田さん



間伐後の木の根を掘り起こし、作業道を整備

× キメキと倒れるアカマツやスギ。大野地区の細野山に鳴り響くチェーンソーの音。その音に混じり、約30mの木がド

シーツンと倒れる重量感ある地響き。お、倒れる！ と、木が斜めに傾いたところを目撃した次の瞬間には、木は地面に横たわっている。この繰り返しで、細野山では一日に100本ちかくの木が伐られていく。

2月21日、小林さんに案内していただき、細野山での作業のようすを見て回った。山に入るには作業道を使う。細野山には多くの作業道が走っており、最終的には軽トラックでも通れるよう仕上げるようだ。

立木を伐る、という状況を目の当たりにするのは今回が初めてであったため、山のなかに入ってから聞こえるチェーンソーの音に高揚していた。その現場を訪れたとき、ちょうどアカマツが倒れるところだった。松くい虫の被害を受けたアカマツを、倒木の危険がないように伐っておく。

吉田 卓さん(67)は、林

業このみち30年のベテランだ。3年前に南都留森林組合に入り、これまで培った経験や技術を若手の職員に伝えていく。「危ないから

ちよつと離れて見てみてください」ということで、吉田さんが木を伐る地点から5mほど離れて、一本の木を伐るようすをうかがった。まず、吉田さんは足もとにある枝木を伐りだした。なにをしているのだろう、と木を伐

るまでの動きを見守っていると、小林さんから「逃げ道」を確保しているのだと教えてもらった。林業は危険と隣り合わせの仕事なのだ。自分よりもぐんぐん高い木を伐り倒すさい、倒れてくる木が自分に当たれば命の保障はない。そのため、逃げ道をつくることを優先する。チェーンソーの刃を木の根元に向けて伐り始めるから2〜3分、木が傾くと同時に、吉田さんも木からサツと身を引き、倒れるのを見守った。

このあいだも、近くにいるほかの職員の方々が木を伐り続けていた。あちこちでメキメキと独特の音を発して倒れていく木が目がいった。高い木があつというまに倒れていく。静寂な森のなかで一瞬一瞬の作業が積み重なっていく。どれも初めて目にして、耳にす

る光景だ。これまでは、本学の講義やフィールドワークを通して、林業について「なんとなく」は知っているつもりでいた。だから、じつさいの現場を見ると、その迫力に圧倒されてしまった。どのように木を伐り、仕事をこなしているのか。現場で働くかたの考えや姿勢を知ることが大切なことなのだ。

◇

「一日があつというまに終わる」と吉田さんは言う。職員は、朝早くに出勤し、その日の作業現場や仕事内容を確認し合い、山に向かう。山に入ると、それぞれの持ち場に慣れて、日暮れまで作業にあたるのだ。現場を熟知し、基礎が培われていると、手ぎわよく次々に木を伐ることができるよう。

林業の経験がない職員も、吉田さんのような熟練者から技術を受け継ぎながら、少しずつ腕を磨いている。林業に大切なのは、「技を盗むこと、それに根性もある」。「俺もこの世界に入ったころは、チェーンソーをもたせてもらえなかった」と言う吉田さんも、先輩の姿を見て技を盗んできた一人だ。

100haと口には簡単に出来るが、いざ山に立ち入ると、ほんとうに広い。職員は日々、

山に入って黙々と木を伐り続けている。伐つた木は機械で山から搬出して、木材市場へ出荷する。細野山には山の所有権をもつ「所有者」が40人ほどいる。それら「所有者」のもつ山を調査し区画を把握して、効率よく山の手入れをまとめておこなう。これを「集約化事業」と呼び、現在、南都留森林組合では細野山の集約化に取り組み、間伐を中心とした作業をおこなっているというわけだ。

山に入ってみると、光が差し込み全体的に明るいことに気づく。まさに間伐の成果である。間伐とは、木の育ちをよくするために、木と木の間隔が窮屈にならないように伐採する作業だ。これにより、木々の隙間から光が差し込み、木の生育は促進する。間伐が進んでいる箇所とそうでない箇所を見比べると一目瞭然、明暗がはっきり分かるからおもしろい。そのうえ、光が降り注ぐところに立つと、足もとが暖かくて気持ちがいい。「10℃もあれば、暑くなってくる」と吉田さん。山の空気が気温にあらためて気づく。林業が「見えない」仕事であると指摘していた小林さんの話（71号・前編参照）を実感することができたのだ。

そう思うと、今回の経験で私自身が林業に一步近づいたといえる。けれど、木は長い長い時間をかけて大きくなる。間伐をする姿を見知っても、その一部を垣間見たに過ぎない。苗木を植えて、木が太くなり、経済的価値が生まれるまで長い年月を要する。手入れをして木を育てること40〜50年、ようやく木を出荷できるのだ。人には途方もない時間だが、世代を超えて守られていく奥の深い仕事だ。

日常生活のなかで山と接する機会が減り、山と縁遠くなってしまう昨今^{まもなく}。林業を通じて、私は山に近づいていきたい。また、木を伐る現場に初めて立ち会ったことで、これまで「なんとなく」受け止めていた林業を具体的に考えられるようになってきた。そして、山の現状や林業に携わる当事者の思いと、現場の作業そのものが結びついたことで、ようやく林業と出会ったのだという実感も持った。身近でおこなわれている林業をきっかけにして、さまざまな視点から山に向き合うスタートラインに今ようやく立てたような気がする。現場に入ること、それがもつとも純粹に私の問いと学びを蓄えていく原点となるのだろう。



足もとの枝を伐って、「逃げ道」を確保する吉田さん



作業内容について小林さん(右)からうかがう筆者(撮影:香西恵)

地域の語りが 示すもの

上野原市にある全校児童が20名ちよつとの上野原市立桐原小学校は、今年の3月で閉校を迎えます。そこに通うのは、遠くからでも大きな声であいさつをしてくれる人なつっこい子どもたちです。そういえば、日ごろお世話になっている地域の方々の多くが、この小さな学校の卒業生なのです。小学生くらいの頃はどのような暮らしをしていたのだろうと、聞いてみたくなりました。

狩野慶（ゆずりはら青少年自然の里）＝文・写真

中学生がごろごろと列になって歩いていき、遅刻しそうな中学生が後ろから飛ぶように走ってくるのは怖かったそうです。送迎バスを待つ中学生を一人か二人見かける今のようすからは、なかなか想像できません。

反対に、帰り道のようすを話そうとした鷹取さんは突然、背中を丸めて笑い出しました。あまりにも笑いすぎて目にはうつつすらと涙をためています。「町から荷物を運ぶ牛や馬の荷台に、それっ、と乗つてよ。（家畜を引く）おじさんに、重いからだめ、と言われでもおかまいなしたつたわ」

夏には頭にカバンをのせて、友だちと川を上りながら家に帰つたと言います。気ままでやんちゃな子ども時代が想像できますが、じつはそれだけではないようです。

鷹取さんが小学校中学年くらいまでは、服は着物でした。素材は「お蚕をやつていた」から絹です。「ホオの木でこさえた（つくつた）」板の上で、子どもであつても自分の着物は自分で、手

「ケンカする暇もなかった」

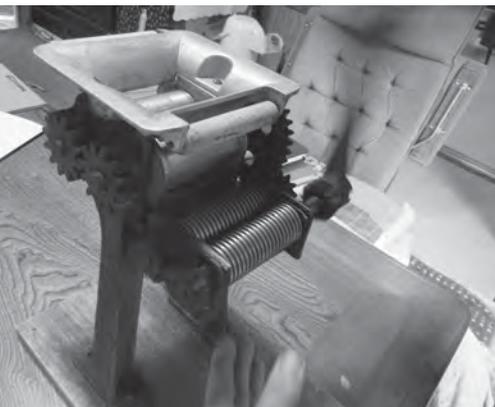
掘りごたつに入つてテレビを見ながら、鷹取民子さん（70）は畑でとれた小豆の選別をしています。外で見かける姿としては、ピンと伸びた背中にしよいカゴを背負い、手をグーにしてぐいぐい歩いていく姿がとても印象的です。小学生の頃の暮らしぶりを鷹取さんに伺うと「変なことばかりだった

ぞ」と言います。どんなことが変わったのでしょ。ごそごそと一緒に掘りごたつに入らせてもらつて、その話に耳を傾けました。

当時の桐原小学校は全校児童がおよそ900人いたよう、沢渡地区に住んでいた鷹取さんは近くの分校に4年生まで通い、5年生からは猪丸地区にある現在の桐原小学校へ片道1時間ほどかけて歩いて通いました。朝、小・

縫いでつくつたというから大変です。片道1時間以上はかかる山奥へ薪拾いにいったり、夕食のうどんの生地をこねておいたりするのも子どもの大切な仕事だということでした。桐原では平らな土地が少ないため、急斜面の土を耕すことが多いです。また、季節に関係なく沢の水も冷たかつたため、お米を多くはつくれなかつたようです。そのこともあり、小麦粉で生地をこねてうどんを食べることが多かつた、といえます。「遊んでる暇なんかなかつたあわ。ケンカする暇もなかつた」

と鷹取さんは言います。昔の子どもは、家という大きな歯車を動かす大切な働き手だつた印象です。



製麺機。うどんの生地をのしたり、麺の形に切ったりすることができる

暮らして生きものとの距離

地域の方々に昔の記憶を聞かせていただくうちに、集落と山を架線で結び、山で切り倒した材木を運んだという話を聞きました。スキー場で目にするリフトのような構造に似ているようです。その跡がわずかに残されていないだろうかと歩き回っていると、「どこへ行ってきた？」と水越久世さん(74)が家の窓を開けて声をかけてくれました。「寄ってけ」と、言われるがままに家の上がらせてもらい、架線の話は何うことにしました。

水越さんの家族は平成の初めまで、架線を使って山のなかにあるワサビ田からワサビを運んでいたようです。時々、滑車で運ばれてくるカゴが「いつもよりゆつくりと、ぶらんぶらんと揺れていた」ことがあって、他の人が捕まえたヘビが運ばれてきたことに気づいた時は、ぞっとしたそうです。飼っていたウサギやニワトリは、特別な日以外はあまり食べなかったということ

ですから、山で捕らえた生きものは畑の作物とはまた違った貴重な食料だったことでしょう。

身近な生きものを捕まえて食べたという話は、ついもつと聞きたくなる不思議な魅力があります。

「お父さんが川にいるコジュケイに向かって鉄砲を撃つわけ。多いときは五羽が一気に落ちてきてね。足をそれぞれ指の間に挟んで持って帰ってくるの」

今までにそのことを何度も話してもらいましたが、水越さんはその度に話している途中で笑いが止まらなくなってしまう。当時のその光景がおかしくてたまらなかったようで、こちらもつられて笑ってしまうのです。ただ、昔と比べるとコジュケイはほとんど目にすることはなくなつた、という地域のかたの声も最近には耳にします。

小学生のころは水越さんと一緒に室所むろどころという場所へ薪を拾いに行った、というのを鷹取さんに聞いたことを思い出します。室所というのは川を挟んで反対側の、小高い山の中腹にある平

らな場所です。大人の足で1時間はかかるそのような場所にわざわざ薪を拾いに行つたのはなぜでしょう。水越さん

は、近くの薪はみんなが拾つてしまつていたのでと説明してくれました。室所へいたる山の斜面は今でこそスギが植えられています。昔は一面が畑だったそうです。一昨年、そのふもとで僕はスイカを育てていましたが、4度ほどサルに食い散らかされてしまいました。60年ほど前は「サルやイノシシはいなかった。動物園で見ると生きものだった」という鷹取さんの話を思い出します。なにげなく水越さんの家から外の景色に目を向けると、ちょうど道路脇のガードレールの下でたずむ一頭のサルがいました。身近な生きものとの距離感が今と昔ではだいぶ違つてきていることを感じます。

鋳突きの名人

「俺はまだ若いほうだからなあ。昔の話つて言つてもなあ」

困つたように高橋敬一さん(60)は

頭をかきます。

去年の8月、キャンプに来た子どもたちと川遊びをしていると、高橋さんがゆらりと現れました。足下に生えていたヨモギを川原の石ですりつぶしたら、手に持つていたゴーグルの内側に曇り止めとしてこすりつけます。そうして鋳をもつて川に入るとほんの数分のうちにアユを突いて見せてくれました。いつのまにか男の子たちは、網を競うように持つて高橋さんの「獵」を見守っています。子どもたちの目を一瞬にして惹きつけた高橋さんの技に、ちよつとした羨ましさを感じたのを覚えていきます。それからというもの、いついどのような子ども時代を過ごしてこられたのだろうかと思ふようになります。「おう」とか「あいよ」とか、そのような返事をする高橋さんは前々からちよつと怖そうな印象がありました。今回は勇気を出してお話を伺うことにしたのです。

昭和30年代の桐原小学校の写真を見せてくれながら、当時は石炭ストーブ



現在の桐原小学校（左、2012年2月20日撮影）と昭和30年代の桐原小学校（高橋敬一さん提供）。背景の山（城山）の頂上は昔、畑だった。教室から突き出る煙突は石炭ストーブのもの

が各教室に置かれていたことを教えてくれます。その焚きつけには「ひで」と呼ばれるマツの根が最適であったようです。「おもっせ」と呼ばれる12月31日には、その「ひで」を地域の小中学生がリヤカーでかき集め、神社で火を焚きます。正月に神社に参拝しに訪れる地域の方々を温かくもてなすため、当時の子どもたちの大切な仕事だったようです。子どもたちで「おもっせ」から元旦まで、一晩じゅう火の番をしていたとのことでした。

転げ落ちたら止まらなくなりそうな、急斜面を耕して畑とする人が桐原では多いですが、「親父と一緒に耕した」という高橋さんの家の前は平らな土地が広がります。ついた屋号は「平」と書いて「てえろ」。高橋さんの家の前を通る小道のすぐ先には透き通った川が流れています。その小道は「てえろつ川へ行くぞ」と意気込む子どもたちのメインストリートになっています。出勤前の「親父」が課す家の手伝いのノルマを、高橋さんは学校から帰

つてからこなさなくてはならなかったいっぽうで、川遊びに向かう友だちの姿が羨ましく映ったといいます。ついで、ふらりと遊びに加わって、「かじり（鉗）」で魚を突く技は「俺がプロ。誰もが、敬ちゃんが一番うまい、と言うと思うよ」というほどの腕前になりました。とはいえ、仕事が終わっていないことが父親にばれると、ゲンコツをもらい、一日じゅう蔵の中に閉じ込められたり、家の大黒柱にくくりつけられたりしたそうです。

鉗突きの名人である高橋さんも、子ども時代には好きだけ遊び回っていたというのではなく、厳しい親のもとで働いていたようでした。

* * *

「やるのがなくてよ」

お話を伺った地域の方々共通して、本音とも冗談ともとれないような調子で言っていたこの言葉が印象に残っています。今では火を起こすのも、

その火を維持するのも手間がかからなくなりました。食べものだって車やバスに乗っていけば市街地のお店で手に入れることができます。桐原で暮らすおじさん、おばさんがたにとつては、ご自身が子どもの頃と比べるとずいぶんと「仕事」が少なくなっただけのことだろうと思います。

今回お世話になったのかたも、お話をしていると笑い出し笑いが止まらなくなることがありました。楽しいことばかりではなく、ぞつとするようなことなども含めて、時には涙を流すほど笑うのです。暮らしをつくる一つひとつの仕事をこなすのに、今よりも手間がかかったけれども、それぞれの仕事をこなすなかで、子ども独特の感性でスリルを感じたり、びつくりしたり、わくわくしたりする濃厚な体験を重ねてきたのではないのでしょうか。過去を振り返って思わず笑いがあふれるのは、それぞれが営んできた暮らしの、目では捉えることのできない豊かさを物語っているのでしょう。

民話のあと

昔話に地名が出てくると、奇妙な出来事が本当にあったのかもしれないと、一瞬どきりとする。昔話という、かたちがないものに近づきたくなると、都留の民話の舞台を訪れた。

平井のぞ美（英文学科3年） 文・写真

元禄12年のこと、たいへん徳の高い祖暁禪師という僧が法泉寺の住職となりました。法泉寺にはお地藏がなく、祖暁は石工に作らせようと思いましたが、お地藏には大幡山の石を使い、厨子（お地藏を安置する箱）と一緒に作ったところ、地藏が大きく出来てしまい、厨子に納まりません。石工は謝り、作り直すことを提案しました。しかし祖暁は「良い出来じゃ。私に任せなさい」と言ってお地藏の前に座ると、「私は人々の成仏を願い、菩薩のお姿にさせているが、なんじはそもそも大幡山の石ころであるのだ。開眼に間に合わぬならもとの山に捨てる。かがめや地藏、かがめや地藏」と力強く唱えると、驚くことにお地藏がお辞儀をするようにうつむいたのです。厨子に納まることできて、無事奉納されることになりました。

それ以来このお地藏は「跏也地藏」と呼ばれ、祖暁さんの法力が込められていると信じられており、多くの人々が祈願に訪れています。

～かがめや地藏～

法泉寺は、都留市田原一丁目にある。門を抜けて境内に入ると、お堂が二つあった。1月中旬、しんとした厳かな境内には、雪がうつつらと積もっている。

このどこかにかがめや地藏があることを考えると、物語の世界の入口にいろいろで、好奇心と緊張が入り混じる。見たいけれど本当に見てもいいのか、と自問自答しながら敷地を見回してみたが、かがめや地藏らしいものはない。お寺のかたに尋ねてみると、左脇にあるお堂に所蔵してあるそうで、快く案内してくださいました。お寺のかたが鍵を開け戸を引くと、丁重に祀つてあるお地藏の姿が見える。物語の片鱗を目の前にしているという高揚感が湧き上がり、ひたすら見入ってしまう。そのうちぞくぞくと心地良い衝撃が走る。お地藏が本当に少しうつむいていたことに気が付いたからだ。

お寺のかたによると、毎年4月の第3日曜日に地藏祭りをするそうだ。檀家さんや近所の人たちが集まって、数日前に渡しておいた赤い紙に名前を書いてきてもらう。紙は一年間お寺で保管し、厄除けを祈る。物語の発祥以来今まで、三百年近く続いているらしい。

そのあいだじゆうずつと、物語は人々に代々語り継がれてきたということだ。

帰りぎわ、不粋だと分りながら、つい「この話って本当にあったんで

しようか」と尋ねた。少しの沈黙のあと、お寺のかたは手を口に当てて「ふふ、どうでしょうねえ。じつはこの話にはからくりがあるんですよ。言いませんけどね」と、笑いながらおっしゃった。お地藏を見て、お祭りの存在を知って、自分のなかにあった物語の世界が色付きました。けれど、話の真偽は曖昧なまま。からくりとは何なのかと一瞬思ったけれど、すぐに聞かなくてもよいという気になった。お寺のかたの愉快そうな笑顔を目の前にしたその時が一番、物語に惹き込まれていると強く感じただけだった。



かがめや地藏



うつむきを拡大



……あらすじ……

十日市場の山に、風変わりな男性が住んでいました。名前は熊太郎。ある日、熊太郎はキツネに憑かれてしまいます。村の人たちは祈禱師を呼んで、キツネを呼び起こしてもらいました。祈禱師がまじないを唱え、「おキツネ様、どうすれば離れますか」と尋ねると、眠っている熊太郎の口が動き「山梨稲荷のそばに祀ってくれ。そうすれば、良いことが起きるときは表通りでコンコンと鳴き、悪いことが起きるときはキャンキャンと鳴いて知らせよう」と答えます。さっそく、山梨神社の社地に小社を借りて祀ったところ、熊太郎は正気に戻って、村人たちは安心して暮らせるようになりました。

何年かして、熊太郎は天寿をまっとうしました。ある日の夜明けに、裏通りで「キャンキャン」とキツネの声がします。村の人たちはキツネの宣託を思い出し、不安になり夜も眠れません。そして、なんと予兆通り、その夜に村の半分が焼ける大火事が起こりました。村人は寝ていなかったため逃げることができ、誰もが無事でした。

このことがあってから、熊太郎稲荷には御利益があるとされ、功德にあやかるうと、近郷からたくさんの人々が参拝するようになったといわれています。



熊太郎稲荷(下)とその入り口(上)

～熊太郎稲荷～

熊太郎稲荷は十日市場にある。地図をもとに探していたがなかなか見つからない。そのうち、二、三度行き来していた通りの民家の脇にある、細い道が目についた。こんな心もとないあぜ道が神社に繋がっているのだろうか、と考えながらその道を進む。歩き出してからすぐに行き着いた曲がり角を曲がると、予想外のタイムングで、小ぢんまりとした神社が目に入る。ひっそりした林のなかに、大人三人がぎりぎりくぐり抜けられるほどの、小さな朱色の門が四基並んでいた。近付くと、それぞれ鳥居の中心に「熊太郎稲荷」と手書きの札があり、奥には古い社が見えた。小規模ながら紛れもない神社であったことに、発見の驚きが感動に変わる。



稲荷のそばの作業場で機械作業をなさっていた、十日市場在住の渡辺敏郎さん(59)によると、熊太郎稲荷は熊太郎という男性が居着くようになると、斎藤家の氏

神としての稲荷だったそう。また、明治以降から現在まで、2月には初午(稲荷の祭礼)が催されているらしい。

気になったのが、渡辺さんはキツネの件については聞いたことがないとおっしゃったことだ。詳しくそうなたがたにお話をうかがってみた。都留の郷土史を研究されている棚本安男さん(83)は、熊太郎稲荷は水源を示すものであるとおっしゃる。ミュージアム都留の学芸員のかたにも尋ねたが、物語の発祥に関する詳しい文献は残っていないとのこと。物語の全容が明らかにならず、民話のもつ年月という奥行きをひしひしと感じた。

じつさいに物語が生まれた地を訪れてみて、人々に親しまれ、長く続くゆかりの行事が催されている、民話の新たな姿に出会い、本を読んだだけでいるよりずっと民話に愛着が増した。お地蔵や稲荷を目にして、物語は真実味を帯びてきたけれど、長い年月を奥底まで透かすようにみることは難しい。しかし、不鮮明だからこそずっと興味を抱いていられる。発祥の地は、自分にとって特別な場所になった。



*参考文献 内藤泰義著『郡内の民話』(なまよみ出版 平成3年)

暖を取る

小さな掘り炬燵



半畳よりも小さい畳。踏んでも落ちないよう頑丈に作られており、かなり重量があった
*一辺の長さ：69cm
(写真撮影日：2012.01.21)

昨年の12月下旬、都留市商家資料館（旧仁科家住宅）を訪れ、館長の藤森利光さん（64）にお会いした。ストーブを囲んで前号の報告もかねがね談笑していたとき、ふと足元の畳の形が気になった。室内の畳のうち、一箇所だけが小さな正方形だったのだ。どうしてここだけ異なる畳がはめ込まれているのだろう。

畳

がなぜこんな形をしているのか。その答えは、じつは自分のなかに何となく持ち合わせていた。前号の取材のとき、関連する話を聞いていたこともあって、すぐにそれが掘り炬燵にあわせた大きさであると勘が働いたのだった。

藤森さんにことの真相を尋ねてみると、やはり掘り炬燵の跡ではないか、という。しかし、じつさいに畳をあげて確認したことはな

いらしく、「この下はどうなっているんですか？」という質問に対し、「どうだろう、開けてみたことはないけど」とのこと。

かくして昔の生活の一端を閉じ込めた「ふた」は、このとき、ふとしたきっかけて開けられることになった。

昔のままの姿で

いよいよ畳が持ち上げられた。けれど、期待に反して見えてきたのは、古びたベニヤ板だった。なんだ、やはり改修されていたのかと落胆したのも束の間、「この板、取れそうだよ」と藤森さんが板に手をかける。私も手を伸ばしてお手伝いし、板を少しばかり横にスライドさせてから畳と同様に起こしてみる。すると次の瞬間、目に飛び込んできたのは、底に真っ白な灰を敷き詰め

た小さな空間だった。

「おお」。驚きから自然と声が漏れ出たような覚えがある。とりわけなにか素晴らしく、美しいものに遭遇したわけではない。灰のなかには長年のごみも混じっていて、汚いといってもよいほどだ。けれど、話に聞いていたものがいま確かに自分の目の前にあると思うと、喜びにも似た感情が湧いてきて、じつと目を凝らさずにはいられなかった。

「そういえば、押入れのなかに掘り炬燵のやつがある」。藤森さんが押入れのなかを覗かせてくださった。手前の収納品の奥に、なにやら木製の台みたいなのが置かれている。「次来たときに出せるようにしておくから」と約束していただき、昨年はこちら資料館をあとにした。



ベニヤ板を起す藤森利光さん。コンクリート製の炉に、灰が厚く敷かれていた
*灰までの深さ：約 17cm



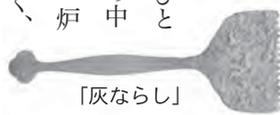
机を設置したようす。丸みを帯びた角や、加工された脚など見どころが多い
*脚の長さ：32cm

年が明けて1月21日の午前中、雪が降りしきるなか、再び資料館を訪ねた。「ちょうど押入れの整理ができてよかつたよ」と笑いながら、さっそく藤森さんが掘り炬燵となるパーツを取り出す。一つは炉とほぼ同じ大きさの木枠。そしてもう一つが、昨年見かけていた木製の机だ。四隅にそれぞれ八角形に加工された脚がつけられており、ちょっとしたところに意匠を感じさせる。触ってみると、全体的にすべすべと滑らかで、使用された年月を物語るかのように机の角は丸みを帯びていた。

ところどころ新しい板と釘を用いて修繕した箇所がみられるが、もとは釘を一本も使わずに作られていたようだ。あとから継ぎ足した部分が色調を乱しているようにも見えるけれど、長年に渡って大切に使われてきたあかしとして好感が湧いてきた。

掘り炬燵を再現する

じつさいに机を炉のうえに設置していただいた。半畳よりもひとまわり小さい炬燵は、家族団欒の中心の場としてはいささか窮屈だ。炉には足を下ろすほどの深さはなく、机の脚は正座して太股がやつと入るくらいの高さでこぢんまりしている。



「灰ならし」

藤森さんによれば、かつて仁科家が絹間屋として栄えたころ、掘り炬燵が造られたこの部屋は、茶の間兼事務所として使用されていたそうだから、小振りなサイズはそうした部屋の機能に対応するものだったのかもしれない。炉の掘られている位置が部屋を中心から少し外れているのは、人の出入りの多さを考慮したからだろうか。きっと忙しい仕事の

合間にあたたかきとひと時の休息を与えてくれる場所だったにちがいない。炬燵布団をかぶせた姿を思い浮かべながら部屋中を見渡していると、あれこれ想像が尽きない。

現在でも掘り炬燵が残っているという話がよく耳にする。けれど多くの場合は床を張るなどして改修されていて、昔のままの姿にはなかなか出会えない。だからこそ、本物を目の前にしたときの嬉しさはいっそう大きく、もっと詳しく知りたいという好奇心はますます膨らんでいった。人づてに話を聞くだけに留まらず、実物を目にして肌で感ずることで、それまで想像でしかなかった部分は具体的に分かるようになり、自分とのあいだに距離を感じていたものはより身近なものとして捉えられるようになった。

昔日の話に積極的に耳を傾け、さらに見たり触れたりしながら自分で確かめる作業は、これからも積み重ねていくことが必要だ。みずから見聞きし考えたことは、次なる学びの機会を得たとき、なによりも心強い支えになつてくれるはずだ。

自分を見つめる

香りのアトリエ「紗泡」



優しい笑顔が印象的な杉本さん。ハーブティーを入れてくれた

ちょっとした幸せで毎日をもっと楽しくなる。私にとってそれはハーブティーを飲んでほっとする時間。おいしく飲みたい、と探していたところ偶然インターネットで見つけた「香りのアトリエ『紗泡』」。ハーブティーにアロマ、石けんなど幅広い体験のできる「紗泡」に惹かれ、主宰者の杉本がおるさんに会いに行くことにした。

1月22日、都留市四日市場よつかいちばにある「香りのアトリエ『紗泡』」をたずねた。県立桂高校の近くということだったが、場所がわからず、電話で教えてもらいながらたどり着いたのは、住宅街にある素敵な一軒家だった。笑顔で迎え入れてくださった杉本さん。とても優しそうで初取材で張り詰めていた緊張の糸が少しゆるんだ。

「紗泡」は杉本さんの自宅の一室で開かれている。杉本さんは「私の実験室でもある」という。机には今作ったばかりだというピンクとオレンジの2つの石けんがあり、となりの棚には乾燥したハーブが瓶詰めされてきれいに並べられていた。どこを見てもかわいらしく、アロマや石けんの優しい甘さで満たされている。

杉本さんは東京都町田市まちだの出身で、結婚して都留に引っ越してこられた。引っ越してきた当時、近所でアロマ教室を営んでいた女性と一緒に、アロマと石けんのワークショップを企画していたことが「紗泡」を開ききっかけになったそうだ。現在でも年間を通して石けんづくりの教室や、アロマセラピーの講座などさまざまな企画を主催している。しかし、

すべてが順調にいったわけではなく、「紗泡」を始めたばかりのころは、なかなか地域の人もたちにも受け入れられなかったという。手づくり石けんといえば廃油でつくるイメージが強く、なんとなく品質が悪そうと敬遠されていた。そこで、地域の人たちに手作り石けんの良さを知ってもらおうと、講座や教室を開いて、じっさいにつくって体験してもらうことを通して徐々に理解されていった。理解を得るまでには会場を探したり、さまざまな企画をしたりと苦しいことが多かったと杉本さんは語る。講座や教室を重ねていくうちに、とくに主婦の人たちに受け入れられ、地域に根づいてきた。

今も続けられている手づくり石けん教室などは、「それをきっかけになにか自分の体調とかで困ったことがあったら（「紗泡」を）思い出してくれれば」という杉本さんの思いから開かれている。教室に参加した人たちが自分でつくった物



お友達に描いてもらったという木の板でつくられた「紗泡」の表札



カラーセラピーで使う色のサンプル。赤、青、オレンジ、透明、ピンクなどさまざまな色が並ぶ。これを見て、気になった色で自分の今の気持ちがわかるという

を自宅ですべて使って良さを発見し「紗泡」にやってくることもよくあるという。既製品ではない、自分でつくる良さ、効果を実感できるいいものを知ってほしい、という杉本さんの気持ちが伝わってくるようで、ますます「紗泡」に惹かれていった。

「紗泡」のコンセプト

活動するにあたっていつも考えていることを教えてくださった。

『人に依存するのではなく見る目を養うこと』

カラーセラピーやハーブティーレッスンはトレーニングなのだという。最終的には自分の見る目を養って、似合う色、そのときの気分にあう香りを選ぶこと。自分を見つめて自分の心を気遣ってあげること。それを手伝うための場所が「紗泡」なのだ。「トータルできれいになれる秘訣はいっぱいあるんだよ、って伝えたい」と杉本さん。ハーブティーもアロマも、私にとって時間があるときにしかできない贅沢だが、杉本さんはその色や香りの力を理解し、日常にとりいれている。お話を伺って、私は新しい生活のかたちを発見した。それは、今は特別なものが、使い続けることで、いつのまにか生活の一部になっていくということだ。私もその過程を味わってみたい。

ハーブティーレッスン

マロウブルーというハーブを知っているだろうか。それだけだときれいなクリアブルーのお茶なのだが、そこにレモンの汁を加えると、さあつと透き通ったピンク色に変わる。こうして見た目で楽しめるのもハーブティーのおもしろさ。でも、市販のものは多すぎて飽きてしまうし、自分で入れると何だかおもしろくない。そんなとき出会った「紗泡」。せっかくなので、ハーブティーレッスンを受けた。おいしいハーブティーを飲むためには好んでブレンドするのがいい。「単品の味がわかればうまくブレンドできるようになる」ということで、それぞれを一つずつ味見させてもらった。一般に売られていて赤い色が特徴のローズヒップティー。しかしそれはよく一緒にブレンドされるハイビスカスが出す色なのだ。今までのローズヒップティーは赤い、という固定概念が覆された。それぞれ単品で飲んでみると、本来の味がどういふものなのかがよくわかる。杉本さんは残ったハーブティーはその日のうちであれば化粧水にも使えると教えてくれた。自然のものだから、安心して使える無添加の化粧水になる。飲む以外の利用法があるとは、とても新鮮な発想だ。

ハーブティーは味覚だけでなく嗅覚でも味わっているという。人工的ではない自然の植物の香りだから、少し草っぽいけれどその香りが本物なのだ。その香りを一つずつ自分のなかにたくわえていけば、見えていなかったものが見えるようになると思う。それが「紗泡」のコンセプトの「見る目を養うこと」のひとつであるような気がする。

本物を知ること、感じることで自分の感性を育てていきたい。杉本さんのお宅では朝、お茶のパックにブレンドしておいたハーブティーを入れて飲むそう。素敵な暮らしかただ。「紗泡」でハーブを手に入れてから、私も毎日好きなものをブレンドしている。同じブレンドでも分量によって味がまったく違い、毎日飲むのが楽しみだ。今度は自分でハーブを育ててみたいとなった。自分でつくることでまた新しい発見があるかもしれない。

小佐野めぐみ (国文学科3年) 文・写真



香りのアトリエ「紗泡」

open: 10:00-17:00

(木・金は 19:00 終了)

完全予約制・不定休

URL: <http://saposap.web.fc2.com/index.html>

写真を「撮る」ということ

もうすぐ都留に来て1年になる。入学後、町の地理を把握するために、都留をぶらぶら歩いていたことで、いつしかこの地を散歩することが趣味ようになっていた。散歩をする時はいつもカメラを持つ。ファインダー越しに見た都留の町は、緑の山々や寺社、どこか趣のある町並みと、被写体ばかりで、飽きることがない。そして今、写真を通して新たな繋がりが広がり始めた。

水野孝英（社会学科1年）＝文・写真



中村修先生がトリミングしているようす

私は work-waku 都留というサークルに所属している。このサークルで昨年12月、公民館でおこなった企画がきっかけで、公民館長の黒部忍くろべしのぶさん（62）と出会った。

公民館に勤めていらっしゃる方々と自己紹介をするなかで、黒部さんの趣味が写真だと知った。その時見せていただいた、黒部さんが撮影した滝の写真は、今もはっきりと思い出せる。水に濡れた岩壁が、銀色に輝いていた。そのほかにも、朝靄あさぎりに浮かぶ白樺の木々や、さまざまな表情の富士山など、黒部さんが撮った多くの写真を見せていただいた。色、構図、撮影方法、時間帯などを練り、狙ったものを撮りに行くという黒部さんの姿勢を見て、これが「作品」として写真を撮るということなのだとは改めて認識する。妥協を許さない写真家としての姿を見て、かつこいなと素直に思った。

ある日黒部さんから、ご自身の所属しているフォトクラブに一度来てみないかとお誘いを受けた。富士吉田市に住む写真家の中村修なかむらおさむ先生に、撮った写真を見ていただき、アドバイスをもらうことができるという。写真について学び、写真家の方々とお話しをする

貴重な機会だと思い、喜んで参加をさせていただきます。

◇

2月18日、19時25分、「フォトクラブ秀峰」2月の月例会が、富士吉田市にある上宿会館で始まった。この日の参加者は私を含め7人。中村先生のお話から始まり、その後の事務連絡が終わると、先生に写真を見てもらうこととなった。机の上に、会員の撮った、多くの写真が並んでいく。風景写真が中心で、そのなかでも富士山の写真が多い。都留市や富士吉田市は、富士山に近いので、気軽に行ける撮影ポイントが多いのだ。写真はどれも傑作に見え、私は目を奪われてばかりいた。

全員で写真を見ながら、思いおもいに意



トリミング前の私の写真



左の岩を隠し、秋の葉をより印象的にみせる

見を交わしていく。中村先生が、冗談や世間話を交えながら気さくに話しかけてくれたので、私はいつの間にか、先生に親しさを覚えていた。先生は写真1枚1枚を評価するなかで、写真をトリミングし、よりよい構図を教授することもあった。ここでのトリミングとは、

写真の上に黒いL字形の定規のようなものを2枚置き、余分な部分を隠すことだ。私が撮影した写真もトリミングしてもらった。まず先生が写真の不要な部分を隠す。意図したものをより目立たせるため、よりよい構図へと変えるのだ。先生だけでなく、一緒に見ている会員も、こつちの角度から撮った方がいいとアドバイスをくれた。少しでも角度や撮影範囲を変えると印象が変わる。撮影時に何パターンか撮っておけばよかったと、思わず悔やんだ。

◇

月例会のはじめにあった、中村先生のお話が印象に残っている。

写真を続けるには仲間が必要だ。上手なつて自立し1人になると、見せ合う経験や張り合いがないために、いつかやめてしまう。写真は自分が「いいや」と思ったらそれで終

わり。自分自身との戦いだから、マイペースにコツコツと、楽しみながら撮ることが大事。

「秀峰」で写真を見せ合うことが、写真を撮る気持ちを駆り立たせる。会員達はひとつの芸術について、心置きなく、意見を交わせる関係だ。「秀峰」の会員は、よい仲間同士なのだ気づいた。

◇

黒部さんも中村先生も、また来るといいよと言ってくれました。来月ももちろん参加するつもりだ。この新しい繋がりのおかげで、写真を通して毎日がより充実する。

写真を撮るといふ行為は、もちろん思い出を残すこともあるが、自分の感性に訴えた一瞬を切り取ることはないだろうか。その瞬間をいかに再現するか。その感動をいかに表現するか。意図するものを伝えることへの高い意識を、「秀峰」で学んだ。こだわりの持つからこそ、狙ったものが撮れたとき、感動を伝えたときの喜びは大きいものとなる。

繋がりが増え、仲間が増え、見せ合う機会が多くなる。そうして写真を撮ることの喜びを実感すると、明日もまたカメラを持ち出そう、と思うのだ。

心と言葉を繋げる詩友会

本誌で聞き取り（16-17頁「起き上がる朝」）をしている遠藤静江さん（79）のこともっと知りたくて、私は去年の11月から都留詩友会に参加している。初めてお会いしたときに、詩が好きで子どものころから書いていたことをお伝えすると「詩が好きなら、ぜひ詩友会に入りなよ」と目を輝かせながら誘ってくださった遠藤さんの姿が、今も印象深く残っている。

言葉を紡いで作品をつくる人がいる。詩友会に入ること、詩をつくること、そこから見えてくるものはなんだろうか。



都留詩友会の詩誌『樹』

都留詩友会の活動

都留詩友会は第1週目を除く水曜日に、都留インターチェンジ近くにある遠藤さんのご自宅で夜8時ごろから開かれている。会員は現在18名。奇数の月は詩誌『樹』の作成をし、偶数の月は作品研究をする。

1月18日。ようやく詩友会に慣れ始めた私だが、今回は取材をするということで、緊張感を抱きながら遠藤さんのご自宅へ向かう。この日は新年最初の詩友会で、『樹』に載せる原稿（ゲラ）に誤字脱字がないかをチェックする。『樹』を作成する月はそれぞれ詩を持ち寄り、原稿をチェックし、製本作業をおこなう。発行部数は全部で400部ほど。印刷したあとは、機械を使わずに、自分たちの手で一部製本をしていく。

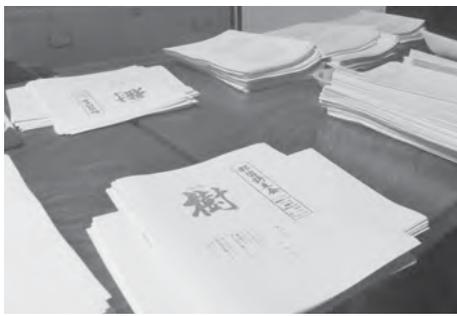
『樹』は2012年1月発行で238号になる。そして今年で37年目を迎えた。「すごく自慢できるのはね、詩友会ぐらい（山梨県で）会員が賞をとっているところはありませんか！ こんなに（238号も）出していることもありません。だから、詩友会に入っているってなったら誇りを持ってください」

と遠藤さんは満面の笑みでおっしゃる。

また、詩友会の発表の場として毎年詩画展を開催し、去年で23回目になった。詩画展を開く前は毎年朗読会をおこなっていた。今回の取材がきっかけで、2月8日の詩友会では、遠藤さんのご自宅にある詩友会の資料を見ながら、長い歴史を振り返った。

遠藤さんは『樹』の第1号から現在までの原稿や、朗読会、詩画展の企画書や写真など詩友会に関する資料をすべて保存している。年代を追って資料を見ると、朗読会も詩画展も毎年少しずつ変わっていることがわかる。朗読会では、会場にシラカバを植えた鉢を置いたり、来場者も一緒に詩の朗読をしたり、自分たちがやりたいと思ったことを次々にやっていた。「あのころは若かったからなんでもできた」そうだ。詩画展は、「最初のころは子どもの展示会みたい」と遠藤さんは振り返っていた。でも、試行錯誤を繰り返して、最近はやうやく会員それぞれの個性が発揮できる展示会になってきたという。

アルバムの写真に写っている、朗読をしている人や展示会を見に来た人たちは、真剣だったり、楽しんでいたり発表の場を満喫し



詩誌『樹』の製本作業。一枚一枚紙を重ねる作業はつい没頭してしまう



遠藤さんのご自宅にある詩友会の資料。数十冊のアルバムとファイルに保存してある

ているようだった。思わず私もその会場にいるような気分になる。遠藤さんと長い付き合いになる会員の関口幸恵さんせきぐちちあきは「遠藤先生の家に行ったらいつでもあのころに戻れるね」とおっしゃっていた。最初、37年も続いていると聞いてもなかなか実感がなかったが、遠藤さんたちの詩友会の思いを聞き、資料を見ることで、37年分の思いが詰まったこれまでの歩みが見えてきた。今までの積み重ねがあつたからこそ、現在の詩友会があり、そしてこれからも続いていく。

「人間つてやつてもやらなくてもいいってなると、やらなくなるのよ。でも、詩が好きだったから書きたいと思った。それなら、みんなでやったほうがいいじゃない！一人じゃできないよ。みんなの力が集結して会ができる。みんなを巻き込んでやる。これつてすごいことだと思ふのね」

遠藤さんは詩友会への思いをそう語る。私自身、大学に入ってから詩を書くという思いはあつたものの、何かと理由をつけてあまり書いていなかった。でも、詩友会に入つてからは積極的に詩を書いている。自分だけではなかなか実行できないことでも、誰かと一緒なら継続できる。遠藤さんは自分が好きなことを、そのことが好きな誰かと共有することを大切にしている。自分一人だけで活動していたら、出会えなかつた人や作品がたくさんあることを知っている。その姿勢が私としても好きだし、これからも見習つていきたい。

詩への思い

詩のどんなところが好きなのかを遠藤さんに尋ねると、

「詩を書くのは大変なことよ。いつでも心に留めておかなきゃ書けないでしょ。でも、書かなきゃ毎日の生活がふつうに流れていくけど、詩を書くと、これは詩になるかなって絶えず思うじゃない。そこが、詩のいいところ」とおっしゃる。遠藤さんにとつて詩は「心のよりどころ」だ。詩への思いを聞いて、私も共通する点があり、すんと腑に落ちた。

私はどうやって詩を書くのかと考えたとき、自分の感情をそのまま書くこともあるけれど、ある物事とじつと向き合いながら時間をかけて書くことが多い。物事から何が見えて、何が聞こえるか。いろいろな視点から見て、何か違うものと結びつけたりすると、自分でもびつくりするようなところから言葉が浮かんでくる。

流れる時間のなかでいつまでも残しておきたい瞬間があるから、その瞬間を切り取り、ものとして、目に見える形にする。詩は写真や絵と違って、パツと見ただけでは何を伝えようとしているのかわからない。でも、読めば読むほど、そのなかに隠れている書き手の思いが見えてくる。自分の詩をあつて読み返すと、書いたときの自分の思いが詩から伝わってきて、そのときの自分に戻れる気がする。少し恥ずかしいし、照れくさいけど、いつでも過去の自分に戻れることは、一歩進むために大切なことだと私は思う。

私にとつての詩は、物事をさまざまな切り口で見つめられる場所であり、そのときの自分の思いを留めておける場所でもある。だから私は詩を書くことが好きなのだ。



教室のレッスンのようす。手前が藤本さん

先生を訪ねる

最終回 学びをたのしむ

冬の寒さの前では、人は立ち止まってしまつこともある。

だからだろうか。

かじかむ指をあたためながら、何かに一生懸命打ち込んでいる人の姿を見ると、こちらまで勇気づけられる。

今回の先生は、小形山でピアノを中心とした音楽教室を開いている藤本多門さん（38）だ。

ピアノの世界は音の世界。見て比べたり、言葉で伝えたりすることは難しい。

ピアノといえば習い事の定番だと思っていたけれど、改めて考えてみるとわからないことも多い。

どんな思いで教えているのだろうか。

音の捕まえかた

2月4日午後5時半、くねった道を1人歩きながら、まだ厳しい寒さに白息を吐いた。富士急行線 田野倉駅から10分ほど歩いたところに「小形山カフェ音楽教室」はある。長屋のような建物の一室奥へと回り込んで、ノックしてからドアを開ける。ほのかな温かさで談笑が私を出迎えた。

この小形山カフェ音楽教室は、幼稚園児から社会人まで、年代を限定せずさまざまな人たちが集まっているのが特徴だ。8畳くらいの部屋のなかには、エレクトーンとキーボード、そしてピアノ。反対側には勉強机がある。兄弟でレッスンに来る生徒もいるため、1人がレッスンするあいだ、もう1人は勉強机で宿題をしていることがよくあるらしい。

小形山カフェ音楽教室の看板とポスター



この日来ていた生徒は小林永並くん(14)。都留第一中学校の2年生だ。部活などの近況と少しの雑談をしたあと、レッスンは始まった。永並くんがかばんから取り出したのは、「ソナタ第8番『悲愴』第2楽章」。ベートーヴェンの数ある曲のなかでも有名な曲だ。どうやら今日からこの曲を練習していくらしい。一度藤本さんがざらりと弾いてくれた。ゆったりとしたリズムと、

物悲しいのどこか優しい旋律が耳を満たす。続いて永並くんも弾いてみる。確かめるように何度も同じ鍵盤を叩く演奏は、まだ拙いものだ。それでも何とか1フレーズを弾き終えると、藤本さんはうんうんとうなずいて「ちゃんと楽譜、読めてるじゃん」と言った。「じゃあこの曲は何調でしょう」。まるでクイズのように、藤本さんが問いかける。へ音記号の隣に4つ並んだフラットのマークは、ラ・シ・レ・ミの音にそれぞれ当てはまる。「悲愴」はラのフラットが主音になる変イ長調の曲だ。「何調かで曲の世界が変わるからね。一つの国みたいなものだと思う」と話す。調が変わるとどのように変わってしまうのだろう。試しに、藤本さんがシャープやフラットがまったくないハ長調で「悲愴」を弾いてみる。明るくて華やかで、変イ長調の持つ、悲しみに浸るような重さはない。本当に世界がまったく異なってしまうのだ。ほかにも重要なポイントとして、たいていの曲は右手でメロディを奏

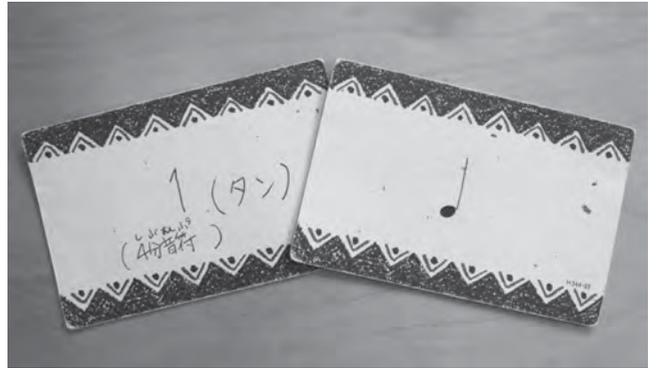
で、左手で伴奏をするけれど、「悲愴」の場合は右手でメロディと伴奏をこなすし、左手で伴奏とベースを弾くことも教えてくれた。左右の手にそれぞれ割り振られた複雑な役割が、この曲に更に奥行きを与えているのだろう。曲の構成を理解するのはなかなか難しい。私が幼いころにやっていたエレクトーンの記憶を引っ張り出しながら、何とかついていける程度だ。けれど曲の仕組みや特徴を解きほぐしていくと、「悲愴」の美しい旋律にはきちんとした裏付けがあるのだとわかる。30分のレッスンを終え、最後に永並くんはモーツァルトの「トルコ行進曲」を弾いてくれた。過去に練習したものを思い出しながらの演奏だったため、少しだどたどしいところもあったけれど弾むような調子が心地いい。今回の「悲愴」とは明らかに違う雰囲気だ。何故「悲愴」を選んだのか聞いてみると、藤本さんが次のお題として選んできた3曲のなかからこれを感じて入って始めたのだと言う。永並くん

はずっとジャズなどの明るくてテンポの早い曲をやっていたらしい。「こちら辺で1曲ゆつたりとした曲をスカッと弾けるようになったらかつこいいと思って」と藤本さんは笑う。

永並くんは小学2、3年生のころから2人の姉についてくる形でピアノを始めたものの、これまではあまり練習が好きではなかったようだ。けれど、最近になって急にやる気が湧いてきたのだとか。藤本さんいわく、元から音楽が好きならどこかでスイッチが入ることがあるらしい。「何で、今までちゃんと練習してなかったのかわかんないや」。永並くんは少し照れくさそうに言った。

「レッスンはたのしい」

「小形山カフェ音楽教室」という少し変わった名前。藤本さんは「別に喫茶店をやっているわけではないんです」と苦笑いする。由来は、弟さんと一緒に組んでいたバンドの名前から。一曲の音楽は、人生を大きく変えてく



藤本さん手作りの音符カード

れるほどのものではないけれど、人の気分をほんの少しだけ変えてくれる。そのほんの少しが、カフェでコーヒを飲んだ時の気持ちに似ている。そう藤本さんは考えている。

藤本さんの音楽への入り口は、小学1年生から始めたエレクトーンだった。高校のときに初めて男性の先生に習うことになった。その当時は男性でエレクトーンの指導をしている人は珍しく、自分が誰かに楽器を教えるとい

う発想が出てきたのもそのときからかもしれない、と振り返る。高校卒業後から、本格的にピアノも学び始め、現在は教室での指導のかたわら、地域のホールでの演奏会や自身で作曲したピアノ曲のCD制作をおこなっている。

幅広い年代の人と関わっている藤本さんは、教えかたも年代や生徒の性格を考慮して決める。幼稚園の生徒にはテキストに沿いながら童謡などの身近な音楽から始めていき、感覚をつかんでもらう。また、藤本さんが手作りした音符や休符の記号のついたカードゲームや、30秒で指示された音を何個弾くことができるかを競うゲームで、たのしみながら覚えてもらう。

小中学生からは、テキストを基礎にして調や和音を学ばせる。ある程度技術が身に着いたら好きな曲をやらせてあげるのも飽きさせないコツだ。社会人をはじめ大人の場合は、教室に来る時点で弾きたい曲があったり目標がしっかりしていたりすることが多いので、基礎もやるものなるべく早い段

階で好きな曲もレッスンしていく。

どの年代を相手にしていても、ピアノや音楽をたのしみ、上手く弾けて喜ぶ生徒の姿を見たいという思いは変わらない。その曲のおいしいところ、音楽のプラスアルファのたのしみかたを教えたいと藤本さんは考えている。それは、藤本さん自身が誰かに習うことが好きだからかもしれない。先生の指導を受けて「自分はなんてできていないんだ!」、「ここまでやれるんだ!」と気づけること、それがレッスンの醍醐味だと藤本さんは思う。

「レッスンはたのしい」
そう語る藤本さんの顔は、ピアノ教室の先生でもありピアノを追求する演奏者でもあり、ただただ音楽が好きな一人の男性のようでもあった。

今まで感じたことのない、言葉にできない感情を味わったり、無条件にたのしいと感じたり、音楽はいろいろなたのしみかたができる、と藤本さんは言う。ピアノを弾くばかりでなく、CDを聴いたりコンサートに行ったり、

たのしむ手段も一つではない。ピアノを通して音楽をたのしんでほしい、できれば生徒が藤本さんの手を離れても、音楽をたのしむ心を持ち続けてほしい、というのが藤本さんの願いだ。「教室をやめたあとでも『今も弾いてるよ』って言うてもらえれば、嬉しいかな」

ともにたのしむ

私が小・中学生のころ、学校でも習い事でも、先生というのは自分のなかでとても大きな存在だった。けれど、先生が生徒の人生のなかで関われる時間というのはそれほど多くない。長年にわたって教えていたとしても、習い事の先生ならば、じつさいに生徒と会って話す機会は一週間に1、2回程度だ。前回の取材で書道教室の先生のもとを訪れたとき、先生とは責任重大だと感じた。けれど、使命感や気負いはかりというのも、なんだか違うような気がする。

藤本さんは「ちよつと変わる、何か

が変わる、それくらいでちよつとどいと思えます」と話していた。きつとその通りなのだろう。どれだけたくさん知識や高度な技術を詰め込んだとしても、先生から離れた途端に「やりたくない」と思ってしまうのでは意味がない。藤本さんとの出会いによって、「ピアノはたのしい、音楽はたのしい」という気持ちが生徒の心に残り続ける。限られた時間のなかで、人の心のちよつとに関わることができたら、どんなに素晴らしいだろう。

私はこれまで4回にわたって、都留の習い事の先生を追いかけてきた。どの先生も人と関わるのが大好きなあなたたかい人で、でもまったく同じ考えをもっているわけではない。

それでは、私のなかでの「教える」とは、「学ぶ」とはどういうことなのだろうか。

「音楽つてなくても死ぬわけじゃないですよ。でもそれが逆に人間らしいと思うんです」藤本さんはそう語る。

着付けの手順が間違っついても、自然

のなかで遊ぶ機会がなくても、きれいな字を書くことができなくても、死ぬわけではない。けれど、人はそれをやりたいと思う。もつと知りたいと思う。人間は動物のなかで唯一自分の意思で学ぶ生きものだと言ったことがある。けれどそのなかに喜びやたのしきがなければ、一生涯続けることはできない。だから藤本さんは生徒にたのしんでもらうことを何よりも大事にしているのだと思う。今まで出会ってきた先生もみな生徒に教えるなかで、自分自身が新しい発見をしたり上達できるきっかけをつかんだりすることをたのしんでいるようだった。

ここまで考えてみて、ただぼんやりとしているけれど、何かをつかめたような気がする。きつと学ぶことの本質はたのしむことで、先生と生徒という関係を通してお互いに教え合うことは、そのたのしみを誰かと共有することなのだ。



帰りぎわ、玄関をふと見上げると喫茶店のような看板が

私は来年度5月に中学校で教育実習をする予定だ。もしかしたら辛いことや大変なこと、想像とは違うことも待っているのかもしれない。それでも、もう私のなかに言い知れぬ不安はなくなった。一緒にたのしみながら生徒と向き合ってみたい、ちよつとでも人と関わることで、教えることの意味をもつと深めていきたい、という気持ちがわいてくる。もしまた「教える」ということを見つめ直すことがあったら、ここに書き残してみよう。それまでは先生という道を進進してみよう。

大澤かおり（社会学科3年） || 文・写真



麦踏み

12月23日、中屋敷フィールドの畑で「麦踏み」をおこないました。麦の芽を足で踏むことで伸び過ぎをおさえ、根張りをよくするための作業です。

毎年麦をつくってきた畑では生長がまばらでしたが、このたび道具小屋の正面に拡張した畑には、より多くの芽が出て青々と育っていました。渡邊宗男わたなべむねおさん(81)の「もっと厚く播け」という教えによって、小屋の正面は麦の量を多めに播いたことも一因かと思われませんが、播く麦を変えたことや(71号をご覧ください)、日当たりなども関係しているかもしれません。今後も成長のしかたに注目しながら作業を続けていきます。(牛丸景太)



一列ごとにみんなで「カニ歩き」

梅の剪定



からまっているツルを切る

1月26日、梅の剪定せんていをおこないました。観察小屋の屋根に登り、張りだした枝から長く伸びているところを剪定ばさみで切ってゆきます。間近で枝を見ると、小鳥の卵のてっぺんが外れたようなかたちのものが生えているのを見つたり(あとでイラガのマユだとわかりました)、太くて梅の木より強そうなツル(ツルウメモドキ)が巻き付いているのがわかったり、梅の花芽がふくらんでいることにも気がつきました。上のほうにある果樹園ではもう咲いていたそうです。

この日、中屋敷フィールドは一面雪に覆われていました。一段と寒さが増していくこのころに、梅は花を咲かせるとは！ わたしにとって梅はまた一歩気になる存在になりました。たくさん花を咲かせて実をつけますように。(香西恵)

10周年に向けて



みなさまに支えていただき、来年度『フィールド・ノート』は発行10周年を迎えます。そこで、73号～76号の4回にわたって、「10周年企画」を計画しています。

私たちにとっての『フィールド・ノート』とはなにか。どんなことを大切にしながら活動をしてきているのか。今までの歩みを振り返り、新たなスタートへとつなげる節目の企画として進めていきたいと思ひます。(10周年企画班)

10周年企画のロゴ

10周年に向けて鋭意制作中



本誌編集部=写真
深澤加奈(国文学科1年)=イラスト

キジがビオトープに

編集室の大掃除をしていた12月26日、イネの穂をつついて食べているオスのキジを編集室前のビオトープで発見しました。近寄ると、ヒトの気配を敏感に察知し、ドウダンツツジの茂みに隠れてしまいます。1時間くらい、どうにか写真を撮れないかとキジとの攻防戦を繰り返して、ようやくその姿を一枚、カメラに収めることに成功しました。

キジはどこからやってきたのか、近くに住みついているのか、疑問は次々に浮かんできましたが、ただただ大学にキジが舞い降りた事実には驚くだけでした。動物園でしか見たことがなかったキジを、日常のふとした瞬間に観察できる。その不思議さ、特別さにあらためてこの地の魅力を感じたひとときでした。

(崎田史浩) このあと自然科学棟のほうへ飛び去った



駅の展示替え



駅構内で展示を張り替えているところ

1月26日、富士急行線 都留文科大学前駅構内の展示替えをおこないました。カメムシが壁の隙間で越冬していました。今回の展示は、本学の「博物館各論」を受講している学生が講義内で制作したものを掲示してあります。木の実のクイズや都留市の風景の写真、意外と知らないムササビとモモンガの違いなどを紹介した展示です。ほかにも、都留文科大学や都留市の歴史などについて、さまざまな情報を紹介してあります。駅にお越しのさいは、ぜひご覧ください。

(地域交流研究センター職員 今泉圭一郎)

味噌完成!

2月15日、発酵するのを待って、編集室で保管していた味噌の樽を開けました。この味噌は去年の2月下旬、編集部でお世話になっている本学印刷室の前田太二(62)さんの味噌づくりに参加させていただき、仕込んだものです。

みんなで蓋を取ると味噌のいい香りが広がりました。中身をかき混ぜたらいよいよ味見です。塩辛さも少しあるけれど、全体的にまるやかで優しい味に仕上がっていました。そのあと、シメジ・カブ・ネギを餅と一緒に鍋に入れ、味噌で味付けした雑煮をつくりました。手づくり味噌はこれからどんどん活躍の場を広げていきそうです。

(深澤加奈)



表面のカビをスプーンで取り除くようす

FIELD NOTE

no.72 Mar.

発行人

北垣憲仁〔20-23〕

統括編集者

西教生〔20-23〕

編集長

香西恵〔2-5,12-15,18-19〕

牛丸景太〔32-33〕

前澤志依〔38-39〕

編集

狩野慶〔27-29〕

石川あすか〔1,16-17,48〕

大澤かおり〔4-5,10-11,14-15,40-43〕

小佐野めぐみ〔34-35〕

崎田史浩〔24-26,44-45〕

反保智栄

平井のぞ実〔30-31〕

藤森美紀〔6-7〕

持田睦乃〔8-9,46-47〕

深澤加奈〔44-45〕

水野孝英〔36-37〕

□ゴデデザイン

工藤真純

〔 〕は編集担当ページ

FIELD・NOTE（フィールド・ノート）

発行日：2012年3月14日

発行部数：400部

発行・編集：

〒402-8555

山梨県都留市田原3-8-1

都留文科大学

コミュニケーションホール地下1階

地域交流研究センター

フィールド・ミュージアム部門

『フィールド・ノート』編集部

E-mail：field-1@tsuru.ac.jp

編集後記

寒い冬、ホッとするひととき

ひゅるるーん、と北風小僧がまちにやってくるなかで、聞こえてくる子どもたちのはしゃぎ声。雪が降った次の日に外に出てみると、ちょこんと姿を現した雪だるまやかまくら、ソリの跡を発見。雪の日は冬でも外でもおもしろい遊びの絶好のチャンスようです。私も子どものころは雪が積るととにかく嬉しくて寒さなんか忘れて朝から晩まで遊んでいたなあ、としみじみ。「大人も風の子」でありたい、と身を縮こませながら思うのであります。（前澤志依）

ばいとをしているお店によくいらっしゃるお客さん。会うたびに優しい笑顔で元気をくださるそのかた、ふだんはカフェを営んでいるのです。そのカフェに行きたくてうずうずしていたのですが、ようやく暇をみつけて友達と行った冬の日。手作りのケーキが何種類もあるなかから、チョコレートケーキを注文しました。すると、友達のぶんも含めて、温かいカフェラテと紅茶をごちそうしてくれたのです。「バイトがんばってね」と。バイトをされていて広がる出会いもまた、心の励みになりますね。（崎田史浩）

りんとした冬の空気はとても爽やかで、深呼吸すると気持ち引き締まります。しかしそれは暖かい空間に身を置けばこそ、よりその清々しさに気づけるのでしょう。この季節はやはり暖房機器のありがたさをつくづく感じます。前号と今号で昔の暖の取り方について取材したためでしょうか、今年の冬は愛用のヒーターに感謝の念を禁じえません。寒い朝、ヒーターの前でしばらくじっとして過ごすのが、幼いころから変わらない私の朝の習慣、ささやかな幸福のひとつです。（牛丸景太）

ここに芽吹く花がある

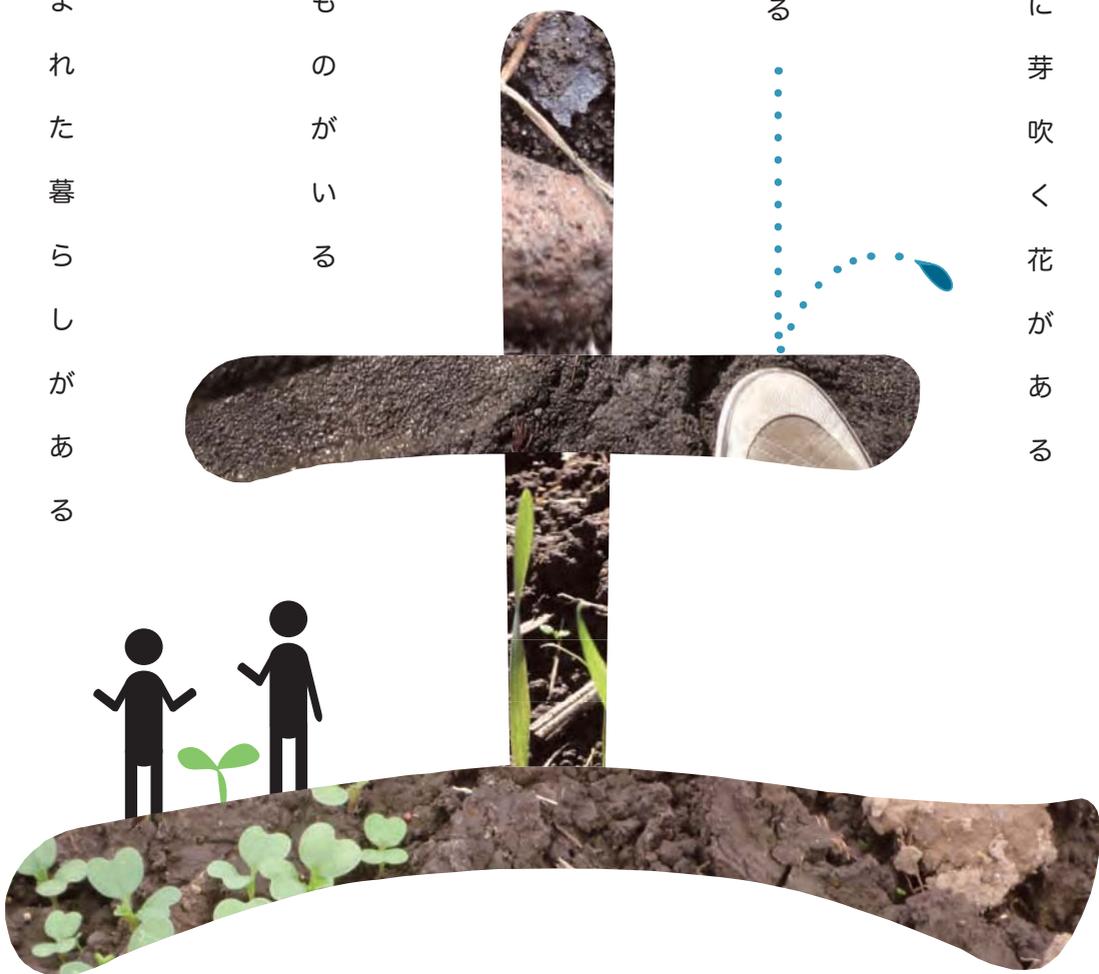
それを耕すひとがいる

2012年5月発行予定
ワールド・ノート73号

次回予告

その上を歩くいきものがいる

そこで生まれた暮らしがある



FIELD・NOTE
no.72

発行日 2012年3月14日（年4回発行）
発行所 〒402-8555 山梨県都留市田原3-8-1
都留文科大学 コミュニケーションホール地下1階地域交流研究センター
フィールド・ミュージアム部門『フィールド・ノート』編集部

